第２章　第６次調査の記録
（青藍会館建設予定地の発掘調査）

第１節　調査の経過と概要

１　調査にいたる経緯

1986 年（昭和 61 年）には徳島大学への寄付建物として旧学生寮（旧陸軍練兵場下士官集会所）跡地に医学部同窓会館が建設されることとなり、当該地における埋蔵文化財の取り扱いについて関係者の間で協議された。この場所は徳島市庄遺跡の中心部分にあたるため、周到な対応策が求められる一方、徳島県教育委員会にその都度調査を依嘱する従来の方法では、さまざまな問題が生じることも次第に認識されはじめたところであった。また大学構内における埋蔵文化財調査である以上は、大学側が責任をもって対処すべきであるとの意見も強くだされ､調査体制の整備を講じる必要性が生じてきたところでもある。

こうした状況のもと、今回は学内的措置として自前で調査会方式を採用する方向が模索されることとなり、文化庁・県教育委員会を含む関係諸機関の間で合意に達した。これを受けて同年 12 月には医学部内に徳島大学医学部同窓会館建設地埋蔵文化財保護対策委員会が設けられることとなり、本委員会の責任において当該地点の埋蔵文化財の調査と保護を担当することになった。

本委員会には本学の考古学専攻教官として岡内三眞総合科学部助教授が加わり、専門分野からの意見が反映される形態をとった。また調査担当の専門職員としては相応の経歴と発掘調査経験を有する人材が求められ、1986 年当時、徳島県教育委員会の文化財調査員であった河野雄次を医学部技術補佐員として採用することになり、岡内とともに調査を担当することになった。

地籍は徳島市蔵本町３丁目 18 番地の 15 であり、調査面積は約 540㎡。調査期間は 1986 年 12 月 11 日から 1987 年３月 20 日までの約３ヶ月間である（図８）。

徳島大学医学部同窓会青藍会、徳島大学各部局、徳島県教育委員会をはじめとする関係各位の協力をうけ、1986 年 12 月 11 日より発掘調査を開始した。

２　調査組織

調査組織は下記のとおりである。

調査主体	徳島大学医学部同窓会館建設地埋蔵文化財保護対策委員会	
	委員長	武田克之（医学部長）
調査担当者		岡内三眞（総合科学部助教授）
		河野雄次（医学部技術補佐員）
調査補助員		馬場史子、大村祥之、森清治、田中博、松本幸浩、島田聡、寺井孝文
		谷本貴美、榎本ゆかり、山内茂樹

３　調査の目的と方法

蔵本キャンパス内およびその周辺における過去の調査例を参照し、今回の調査でも遺構面（生活面）は中世・古代・古墳時代・弥生時代の３ないし４面が遺存しているものと想定した。これら各遺構面の

図８　調査地の位置

調査を通じ、各時代の土地利用の変化と生活形態を追求すると同時に、特に弥生時代の集落跡を検出することにより、稲作農耕開始期における社会状況を解明することを主目的とした。調査区内には５m方眼のグリッドを設定し、南西優位でグリッド名を付した（図11・図21）。基準杭の座標は任意であり、南北主軸は磁北から10度東へ振れている。標高値は東京湾標準潮位（東京ポイント）を用いた。

４　調査経過

12月11日、旧学生寮（旧陸軍練兵場下士官集会所）の基礎・盛土、および撹乱部分を重機によって排除し、遺物包含層（黒褐色粘質土層）を検出した。撹乱が著しく遺構検出が困難であったため、遺物包含層を掘り下げて第１遺構面を検出した。引き続き第１遺構面の掘削、精査に着手。その後下位の土層を掘り下げて第２遺構面を検出し、３月７日に現地説明会を開催した。第２遺構面調査と並行して、縄文時代遺構面確認のために４本のトレンチを設定したが、検出されなかった。さらに下部層序を確認するために、重機により２箇所を約４m掘削し、３月20日、発掘調査を終了した。

３月21日からは整理作業を開始した。出土遺物の洗浄・接合・整理の後、実測・トレースを、遺構・層序実測図については遺物・遺構・層序の一部概略を実績報告書として編纂した。

５月31日、整理作業を終了したが、なお、遺物の整理・実測・復元・遺構・層序実測図の整理などについての作業は未完である。同日をもって河野雄次は医学部技術補佐員を退職。

第２節　調査の記録

１　基本層序と遺構の概要

(1)　検出遺構

今回の調査の結果、検出された遺構の主要なものを年代の古いものから列挙すると、次のようになる。

弥生時代前期の埋葬	石棺墓	2
	配石墓	13
	土壙墓	6
	甕棺墓	1
弥生時代前期の土坑		9
弥生時代中期末から後期の溝		7
弥生時代後期前半の土坑		2
弥生時代後期中期の土坑		1
古墳時代の埋葬	石棺墓	2
古墳時代以降の土坑		9

奈良時代の建物　2
鎌倉時代の埋葬　2

また出土遺物の数量は次のとおりである。

土器類（弥生土器・土師器・須恵器ほか）　コンテナ 45 箱分
木器類（漆製品を含む）　コンテナ　１箱分
石器類・鉄器類　コンテナ　１箱分

(2)　基本層序

調査区各所の堆積状況は図 10 に示したとおりである。調査地南壁の状況にもとづいて説明すると、現地表面は海抜 3.7m、上層から順に造成土、明治時代の旧水田耕作土（第１層）、近世および中世の水田耕作土（第２・３・４層）と続く。その下の遺物包含層（第６層）中には縄文時代から奈良時代までの遺物が認められる。この層の上面に中世、その下位に奈良時代の遺構が形成されている。第６層上面は黒褐色の粘質土層であり、第７層以下第 11 層までは明黄褐色を呈しており、下位の堆積ほどしだいに砂質の比率がたかまる。第 12 層は酸化鉄を多く含む黄味の強い黄褐色砂層であり、第 13 層は黄褐色を呈し、砂粒を多量に含む粘質土層である。第 14 層以下第 19 層までは、きわめて粘質の強い粘土層であり、黄灰色から暗緑灰色へとグライ土壌化し、湿地の状況を呈している。

以上が当調査区の基本層序であり、1985 年（昭和 60 年）に実施された動物実験施設建設に伴う発掘調査地の層序にも類似している。

第７層上面において、鎌倉時代、奈良時代、古墳時代前期の遺構を検出し、第１遺構面とした。また下位の第 10 層上面では弥生時代前期の遺構を検出し、第２遺構面として処理した。

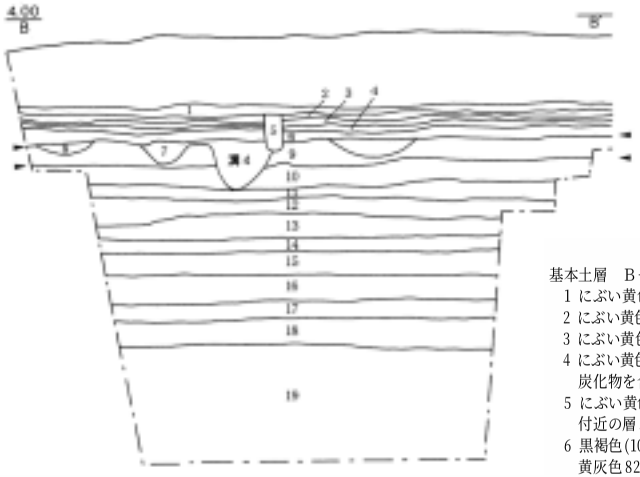
2　弥生時代前期の遺構

(1)　弥生時代前期の埋葬

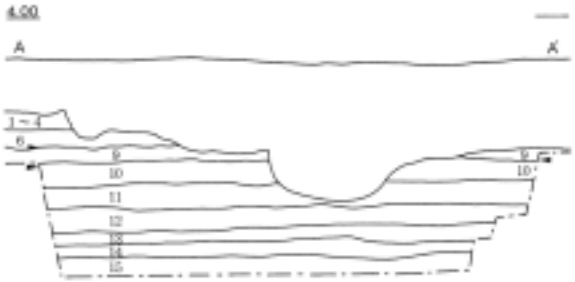
第2遺構面として調査を実施した遺構群が弥生時代前期に属するものであり、埋葬が 22 基、不明遺構４基が検出された。各遺構の分布状態は図 11 に示したとおりである。埋葬の構成は石棺墓２基、配石墓 13 基、甕棺墓１基、土壙墓６基である。全体の配列状態を概観してみると、埋葬形式の差と分布状態との間に明らかな法則性がみられるとはいいがたい。しかし石棺墓が調査地の北東隅に営まれ、配石墓が調査地の中央部付近に広がり、土壙墓は調査区の中央部付近から南西方向にかけて点在するといった状況は、背後に一定の約束事が存在した可能性を示唆するものであろう。

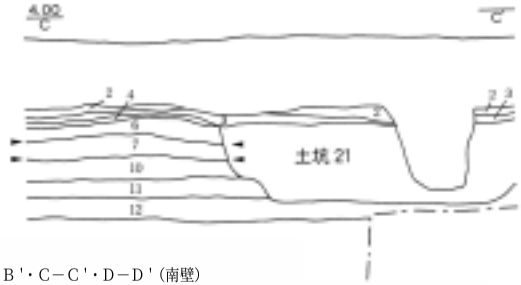
これら各埋葬の長軸方向は、いずれも東西方向を主体としており、各埋葬は直列的に配置される状況が確認された。そのため墓域全体は東西方向に延びる複数の直列埋葬によって形成された可能性を指摘できる。ただし規則的な配列をとってはおらず、軸線が揃うこともない。また調査区の東半部では南北に

図９　弥生時代前期の埋葬風景

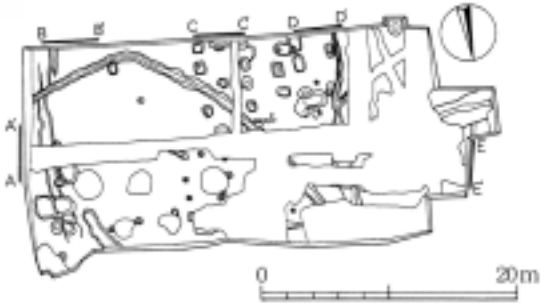


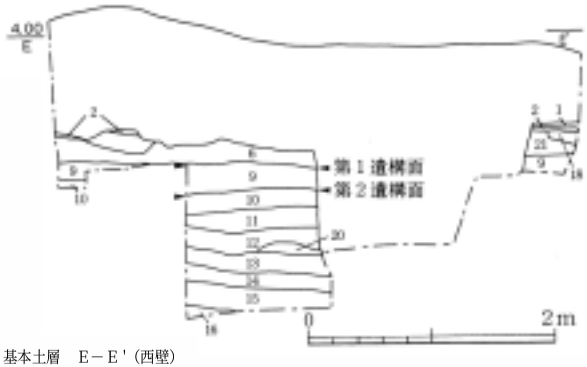
基本土層　Ａ－Ａ'（東壁）
1 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　土器･炭化物を含む
2 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　明黄褐色(2.5Y 7/6)粘質土を部分的に含む
3 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　明黄褐色(2.5Y 7/6)粘質土を第２層より多く含む
4 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　明黄褐色(2.5Y 7/6)粘質土を最も多く含む
炭化物を含む
6 黒褐色(10YR 3/1)粘質土　明黄褐色(10YR 7/6)砂質土を部分的に含む
横灰色(2.5Y 5/1)粘質土を斑状に含む　土器・石を含む
9 明黄褐色(2.5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を斑状に含み、
横灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含む
10 明黄褐色(2.5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を部分的に、
黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含む　第３層より砂質の割合が高い
11 明黄褐色(2.5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を縦縞状に、
黒褐色(10YR 3/1)粘質土を部分的に含む　炭化物が増えてくる
12 黄褐色(10YR 5/6)砂　黄灰土(2.5Y 5/1)粘土を部分的に含む
砂質層の中で最も炭化物を含む
13 黄褐色(10YR 5/6)砂　黄灰色(2.5Y 5/6)粘土を含む　第６層より粘性が強い
14 明黄褐色(2.5Y 5/1)粘土　黄灰色(2.5Y 5/1)粘土を縦縞状に含む
15 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土　緑灰色(7.5GY 5/1)粘土を部分的に含む　炭化物を含む





基本土層　Ｂ－Ｂ'・Ｃ－Ｃ'・Ｄ－Ｄ'（南壁）
1 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　土器･炭化物を含む
2 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　明黄褐(2.5Y 7/6)粘質土を部分的に含む
3 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　明黄褐(2.5Y 7/6)粘質土を第２層より多く含む
4 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　明黄褐(2.5Y 7/6)粘質土を最も多く含む
炭化物を含む
5 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を僅かに含み、酸化鉄を
付近の層より多く含む　土器を含む
6 黒褐色(10YR 3/1)粘質土　明黄褐色(10YR 7/6)砂質土を部分的に、
黄灰色82.5Y 5/1)粘質土を斑状に含む　土器・石を含む
7 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を部分的に含む
8 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を部分的に含み、黄灰色
(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含む　第７層と類似
9 明黄褐色(2.5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を斑状に含み　黄灰色
(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含む
10 明黄褐色(2.5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を部分的に、黄灰色(2.5Y 5/1)
粘質土を縦縞状に含む　第３層より砂質の割合が高い
11 明黄褐色(2.5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を縦縞状に、黒褐色(10YR 3/1)
粘質土を部分的に含む　炭化物含む
12 黄褐色(10YR 5/6)砂　黄灰色(2.5Y 5/1)粘土を部分的に含む　炭化物を含む
13 黄褐色(10YR 5/6)砂　黄灰色(2.5Y 5/6)を部分的に含む　第６層よりも粘性強
14 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土　黄灰色(2.5Y 5/1)粘土を縦縞状に含む　きめが細かい
15 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土　緑灰色(7.5GY 5/1)粘土を部分的に含む　炭化物を含む
16 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土　緑灰色(7.5GY 5/1)粘土を斑状に含む　炭化物を含む
17 暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土　炭化物を部分的に縦縞状に含む
18 黒色(2.5GY 2/1)粘土　緑灰色(7.5GY 5/1)粘土を含む　炭化物を斑状に含む
19 暗緑灰色(7.5GY 4/1)粘土





基本土層　Ｅ－Ｅ'（西壁）
1 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　土器･炭化物を含む
2 にぶい黄色(2.5Y 6/4)粘質土　明黄褐色(2.5Y 7/6)粘質土を含む　炭化物を含む
6 黒褐色(10YR 3/1)粘質土　明黄褐色(10YR 7/6)砂質土を部分的に、
黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を斑状に含む　土器・石を含む
9 明黄褐色(2.5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を斑状に含み、
黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含む
10 明黄褐色(2.5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を部分的に、
黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞に含む　第３層より砂質の割合が高い
11 明黄褐色(2/5Y 6/6)砂質土　黒褐色(10YR 3/1)粘質土を縦縞状に、
黒褐色(10YR 3/1)粘質土を部分的に含む　粘土が少なくなり、炭化物含む
12 黄褐色(10YR 5/6)砂
黄灰色(2.5Y 5/1)粘土を部分的に含む　砂質層の中で最も炭化物を含む
13 黄褐色(10YR 5/6)砂　黄灰色(2.5Ｙ 5/6)を部分的に含む　第６層より粘性が高い
14 明黄褐色(2.5Y 6/6)粘土
黄灰色(2.5Y 5/1)粘土を縦縞状に含む　上層の明黄褐色と比較してきめが細かい
15 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土
緑灰色(7.5Y 5/1)粘土を部分的に含む　炭化物が上層の粘土と比較して若干多い
16 黄灰色(2.5Y 5/1)粘土
緑灰色(7.5GY 5/1)粘土を斑状に含む　炭化物を上層と比較して多く含んでいる
18 黒色(2.5GY 2/1)粘土　緑灰色(7.5GY 5/1)粘土を含む　炭化物を斑状に含む
20 褐灰色(10YR 5/1)砂　炭化物を含む
21 黄灰色 (2.5Y 6/2)粘質土　黒褐色(10YR 3/1)砂質土を斑状に含む

図10　調査区各所の堆積状況

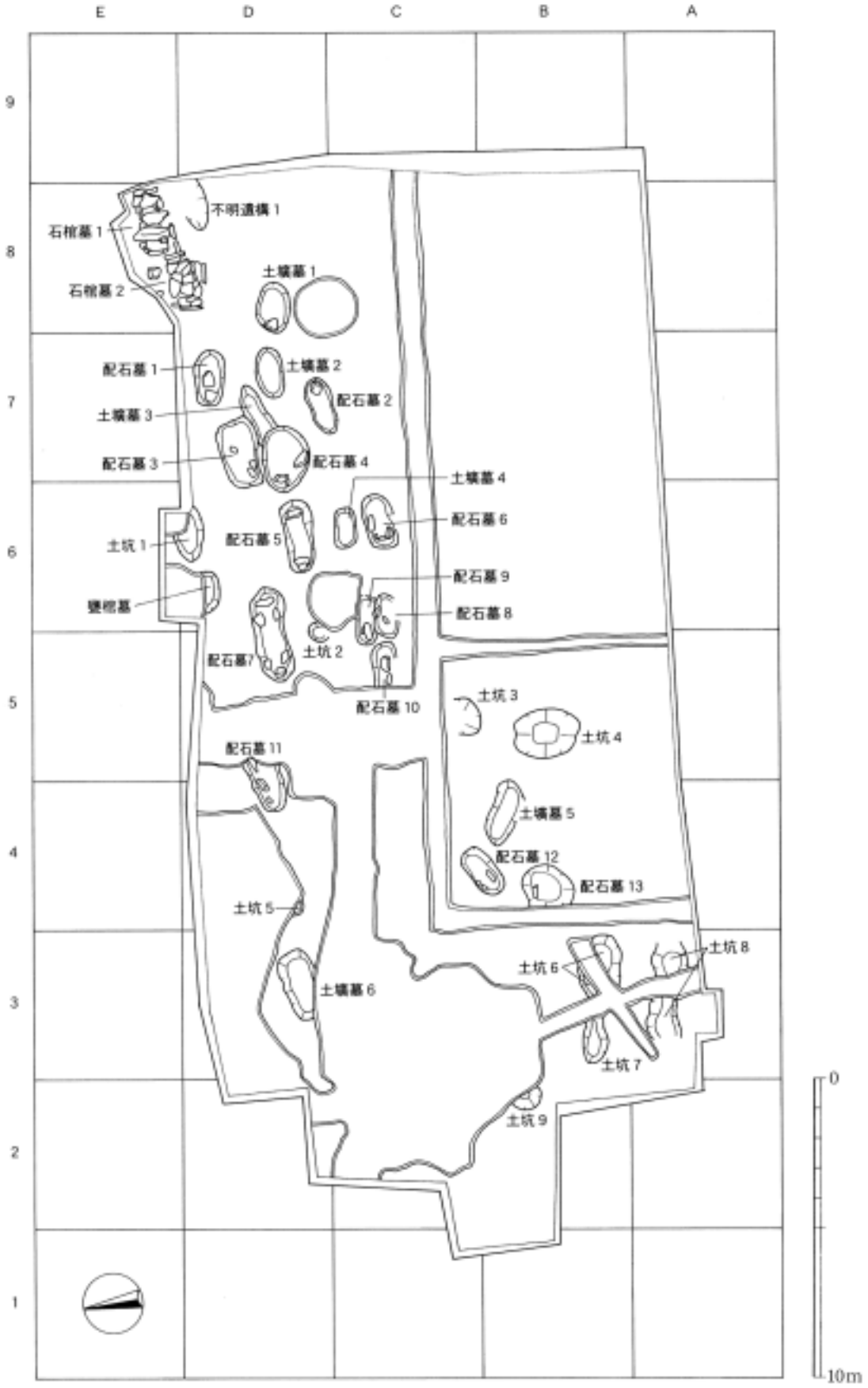


図 11　弥生時代前期の遺構配置

表３　青藍会館地点埋葬施設一覧（甕棺墓を除く）

遺構名	墓壙長	墓壙幅	深さ	墓壙底長（指定棺長）	墓壙底長（指定棺長）	主軸方位	配石数	配石墓類　型	副葬品等	土器類
石棺墓１	2.52	1.30	0.40	「1.54」	「0.44」	N110°W	34			甕形土器１
石棺墓２	1.94	1.26	0.34	「1.41」	「0.80」	N100°W	21			高坏１
配石墓１	1.85	1.00	0.24	1.60	0.66	N079°E	2	２類		壺形土器３
配石墓２	1.86	0.80	0.20	1.70	0.62	N059°E	1	２類		
配石墓３	2.20	1.20	0.30	1.96	0.96	N064°E	4	１類		
配石墓４	2.16	1.78	0.18	1.92	1.32	N081°E	3	２類	管玉１	
配石墓５	2.40	0.88	0.34	2.00「1.50」	0.56	N082°E	5	１類		
配石墓６	1.82	0.98	0.20	1.60「1.30」	0.78	N067°E	4	３類		
配石墓７	3.20	1.00	0.24	2.84「2.40」	0.68「0.46」	N071°E	7	１類		壺形土器（細片）
配石墓８	1.48	0.82	0.14	1.20	0.52	N078°E	2	３類		
配石墓９	現1.60	現0.80	0.07	1.42	現0.46	N100°W	2	２類		
配石墓10	現1.54	0.78	0.10	現1.42	0.52	不明	2	２類		壺形土器１
配石墓11	現1.60	1.00	0.40	現1.46	0.70	N062°E	3	１類	管玉５	
配石墓12	1.76	0.92	0.24	1.44	0.62「0.40」	N139°W	2	１類		
配石墓13	現1.50	1.50	0.40	現1.06	0.80	不明	1	２類		
土壙墓１	1.70	1.10	0.20	0.38	0.78	N078°W	1			
土壙墓２	1.70	0.90	0.10	1.39	0.70	N115°W				壺形土器１ 甕形土器１
土壙墓３	2.48	0.60	0.18	2.29	0.40	N112°W			管玉11 石鏃８	
土壙墓４	1.28	0.64	0.12	1.12	0.48	N063°E				
土壙墓５	2.04	0.92	0.14	1.79	0.62	N072°W				鉢形土器１
土壙墓６	2.33	現1.20	0.22	1.82	0.82	N062°W				
土坑１	1.92	1.04	0.30	1.52	0.64	N091°E				
土坑４	2.08	1.64	0.47	0.88	0.64	N003°E				
土坑６	2.16	1.40	0.36	1.72	0.96	N103°E				
土坑７	1.52	0.80	0.35	1.32	0.28	N102°E				
土坑８	3.52	1.08	0.46	1.32	0.28	N099°E				
石棺墓３				現1.68	現0.72	N083°E	5			
石棺墓４				現1.28	現0.96	N090°E	5			

「　」内の数値は石組みの内法を示す。長さ・幅・深さの単位はm。

隣接するもの同士の間で切り合い関係が認められる。したがってごく大づかみでとらえれば、東西に延びる墓域であるとはいいうるものの、全体を律する造墓秩序として認定できるのは埋葬方位を東西に揃えるという点のみで、それ以上の厳密さはなかった可能性もある。

各埋葬にかんする細かなデータは表３に示したとおりであるが、構造上特記すべき遺構や副葬品等の認められるものを中心に個別の報告を行いたい。これら埋葬の年代については、７基の埋葬および１基の甕棺墓に伴った出土土器の検討結果にもとづき、弥生時代前期の前葉から中葉までの間に限定されるものと認識している。なお石棺や配石墓にもちいられた石材はすべて結晶片岩である。

①　石棺墓

石棺墓２基は隣接した状態で発見されたものであるが、構造上の差異が顕著である。したがって、これらについては個別に報告を行う。

石棺墓１　調査区の北東隅で検出された（図12－１）。床面の内法は長軸約1.5m、短軸約44.0cmで、深さは約40.0cmをはかる。壁面の構築状況は長軸と短軸で異なっており、長軸壁では一部に１枚石を用いているものの、横積みの３段である部分が多い。その一方、短軸側の両壁面では１枚石を鏡石状に用い、その外側に各々２個の石を配する。床面には１個の石が配されている。蓋石の上部は現代の撹乱のために破壊されているが、0.9～1.3mの板石４～５枚を横架して蓋石とし、その間に0.1～0.3mの板石を置いて目張りとする。長軸方向はN110°W。副葬品はみられないが、短軸壁に用いられた石材の大きさ

および床面の広さから判断すると、頭位は西と推定される。

石棺墓２　石棺墓１の西側に接して構築されたやや小型の石棺墓である（図12－２）。墓壙は隅丸長方形を呈し、長軸約1.9ｍ、短軸約1.3㎝、深さ約34.0㎝をはかる。現状で判断するかぎりにおいては石材で壁面を構築する通常の石棺構造とは異なるようであり、石材の配列状態は中央部が窪む石敷に近い。なお西側と南側とに長さ80.0～85.0㎝の板石を各々１枚配してこれら敷石状の石材を覆う。これら石材の並びは墓壙底から25㎝程度浮き上がった状態であり、こうした間隔についての説明が求められる。この点を重視すれば、本遺構は石蓋土坑墓ないし木棺墓の可能性が高いとみるべきであろう。長軸方向はＮ100°Ｗ。副葬品はなく、敷石状を呈する石材の並びの上面からは甕形土器１点が破砕された状態で検出された。なお石棺墓１との直接的な切り合い関係は認められないが、本石棺墓の一部の石材が石棺墓１の上面に重なる状況がみられるため、石棺墓１の構築後に営まれた可能性は高い。

②　配石墓

配石墓としたものには、石材の使用法に顕著な差があり、多様な状況が認められる（図13～図16）。ただし墓壙底との関係で石の配置状態を検討してみると、おおむね３類に区分しうることがわかる。つまり、石材が墓壙底に接する位置におかれ、遺骸や木棺の支えとしての機能を果したと考えられる１類と、床面からわずかに浮いた状態で墓壙の中心部ないし主軸上に平石が水平におかれ、枕石ないし抱石としての機能を想定しうる２類、および床面からは完全に浮いた状態で石がおかれており、標石としての使用以外の実用的機能を想定しえず、儀礼的行為の産物かとも考えられる３類である。本遺跡にかんするかぎりにおいては、こうした分類法にも一応の有効性はあるものと判断されるので、ここでは便宜的に上記のような３類型区分をとることとしたい。13基の内訳は、１類が５基（配石墓３・５・７・11・12）、２類が６基（配石墓１・２・４・９・10・13）、３類が２基（配石墓６・８）である。なお３類としたもののなかには、石蓋木棺墓ないし土壙墓の下半部のみが遺存した状態といえるものもあるのかもしれないが、現時点では不明というほかない。

なお各類型に共通して認められることであるが、墓壙の平面形は長楕円形をとり、断面の形状も丸みを帯びて「U」字形をとるものが多い。類似した状況は石棺墓２や土壙墓にも該当するので、埋葬形式を越えた類似性として解釈できるのかもしれない。

１類の配石墓　１類について、その使用石材の数や配置状態をみると次のようになる。

石材を７石もちい、両小口・両側面に石材を配するもの	配石墓７	（墓壙長3.2ｍ ）
石材を５石もちい、両小口だけに石材を配するもの	配石墓５	（墓壙長2.4ｍ ）
石材を４石もちい、片側の側面に石材を配するもの	配石墓３	（墓壙長2.2ｍ ）
石材を３石もちい、片側の側面に石材を配するもの	配石墓11	（墓壙長現1.6ｍ）
石材を２石もちい、両側面に石材を配するもの	配石墓12	（墓壙長1.76ｍ ）

一見して明らかなように、使用される石材の数と、配置される部位およびその範囲とはおおむね対応していることがわかる。こうした差異は、埋葬における丁寧さの度合いを示すものとみて差し支えあるまい。いうまでもなく上位のものほど丁寧さの度合いは高い。なお本類型の配石墓には墓壙長の非常に長いものが存在する。配石墓７は墓壙長が3.2ｍもあって突出した長さをもつが、ほかにも墓壙長が２ｍを越えるものが２例あり、本類型に属する配石墓の墓壙長は相対的に長い。この墓壙の長さと使用石材の数の多少とを比較してみると、墓壙の長いものほど使用石材の数も多いことがわかり、ふたつの要素は対応関係にあるとみなすことができる。なお配石墓７と配石墓５については両小口部に石材が置か

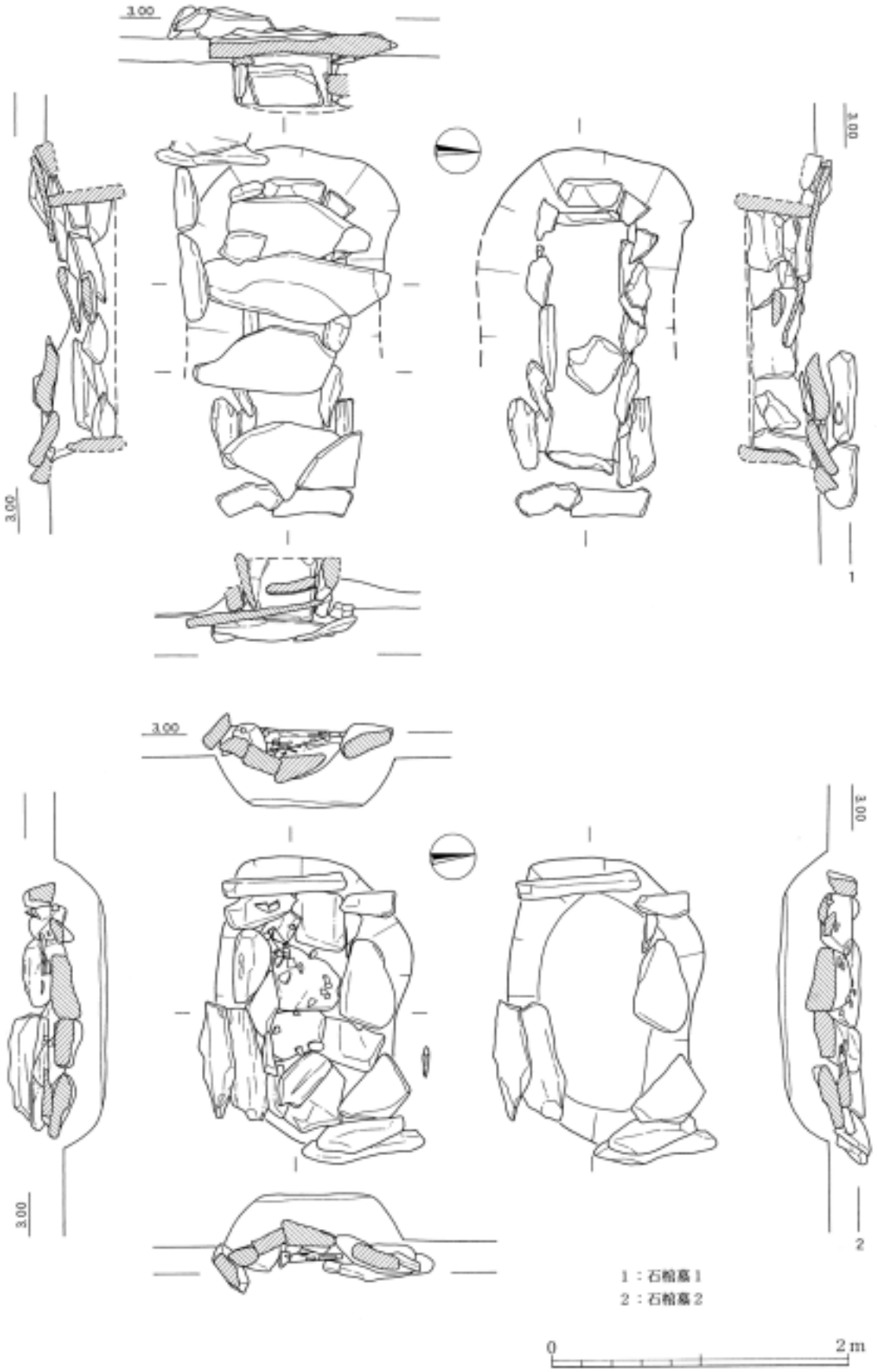
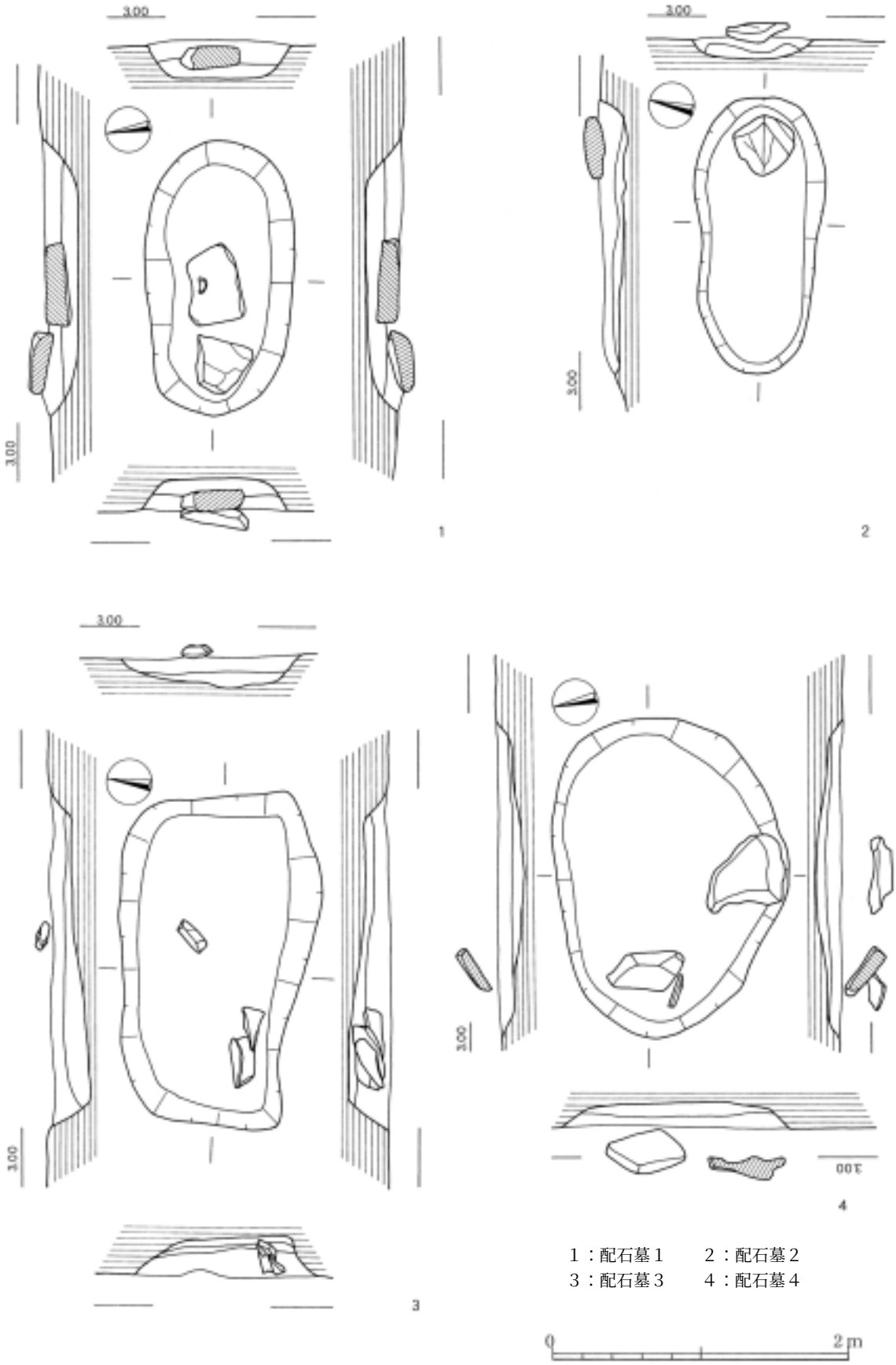


図12　石棺墓1・2



１：配石墓１　　２：配石墓２
３：配石墓３　　４：配石墓４

図 13　石棺墓(1)

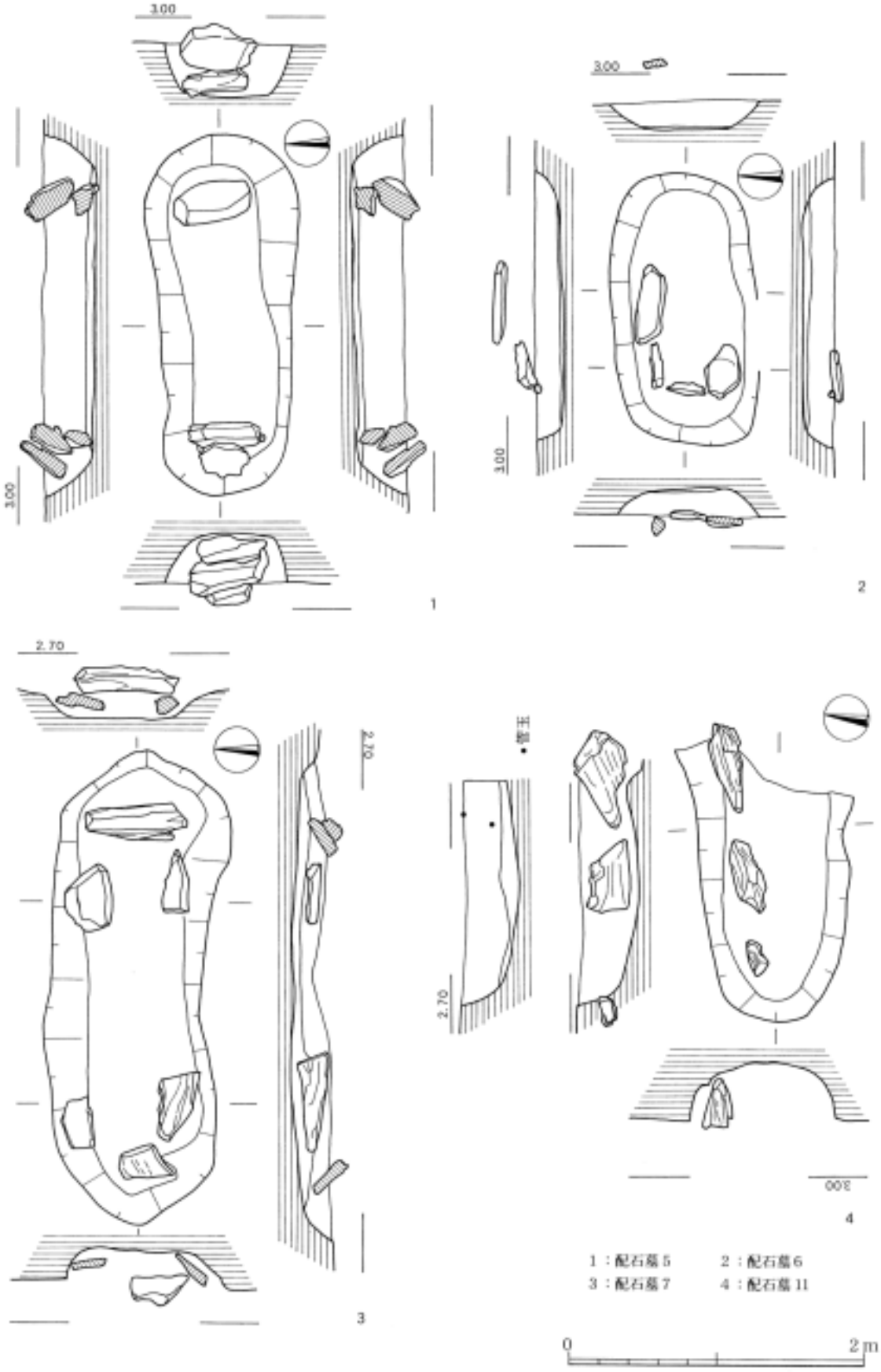

3.00
3.00
1
3.00
3.00
2
2.70
2.70
3
玉類
2.70
3.00
4
1：配石墓５　2：配石墓６
3：配石墓７　4：配石墓11
0
2m

図14　配石墓(2)

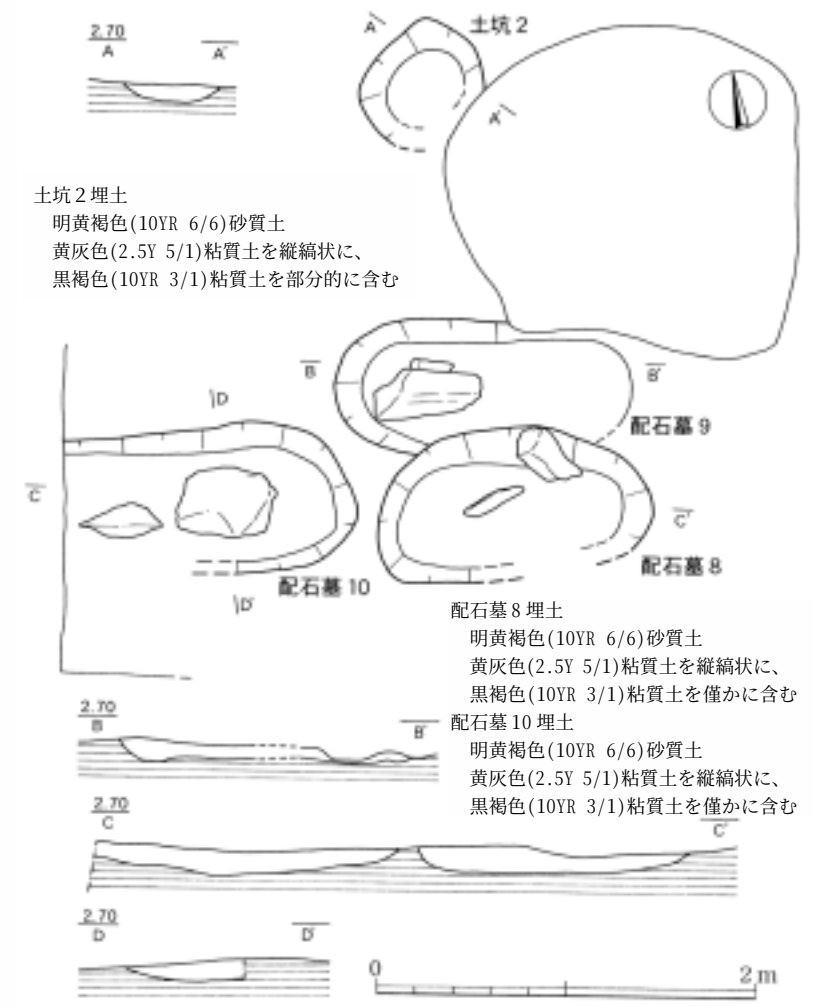


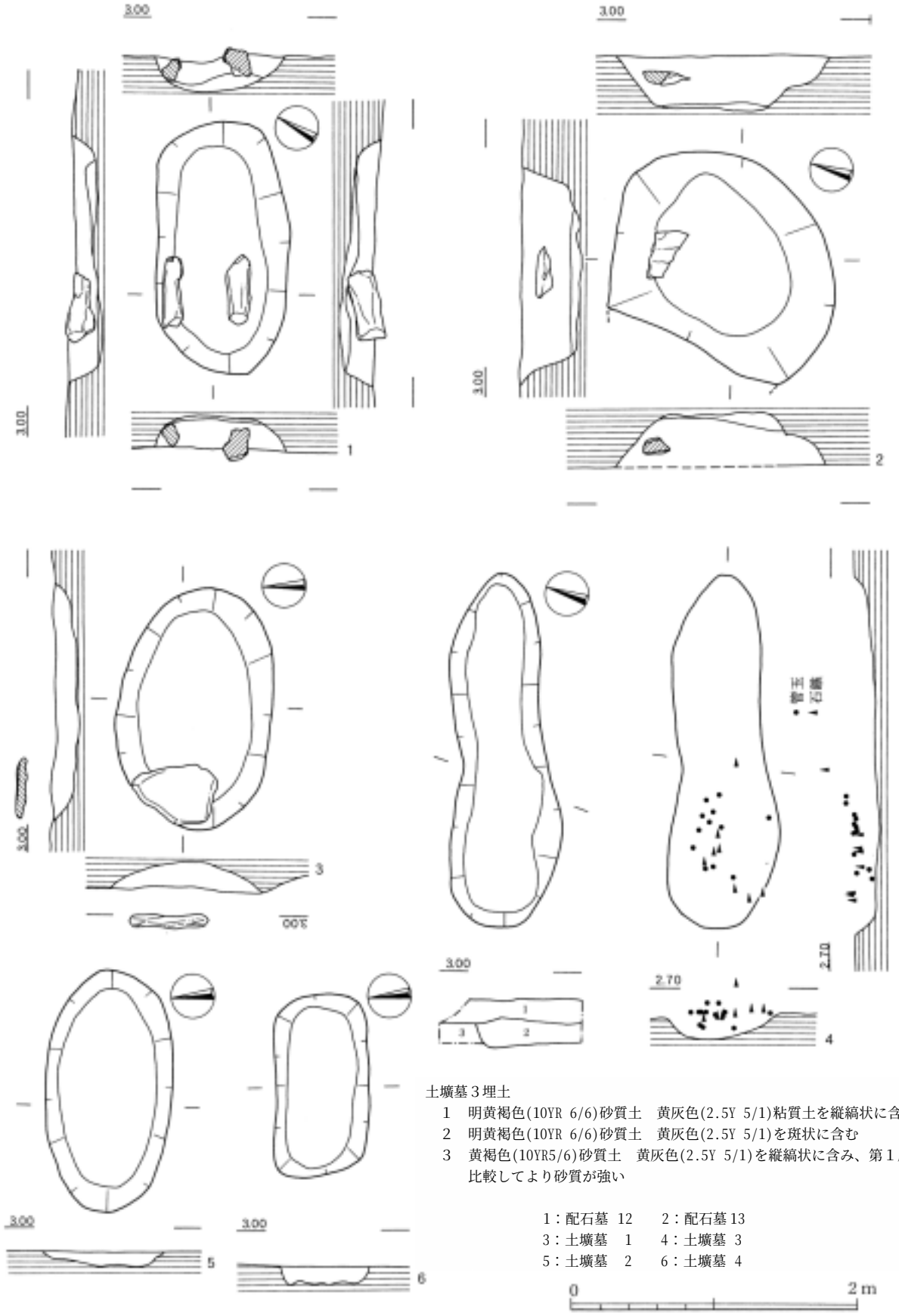
図15　配石墓(3)・土坑２

れているため、その内法の寸法によって遺骸の収納空間のおよそを知ることができる。それによると配石墓７では長さ2.4m、配石墓５では1.5mあり、どちらも伸展葬が可能な長さであるだけでなく、内部には木棺が収納されていた可能性を指摘しうる。

１類の配石墓において遺物のみられる遺構は配石墓11だけであり、ここからは管玉が５点出土した(図35－14～18)。副葬品であろうと思われる。このほか配石墓７の埋土中からは壷形土器の破片が出土した。ただし細片であり、土器については副葬品とは断定しえない。

２類の配石墓　２類の典型例とみなされるのは配石墓１・２である。配石墓１については墓壙西寄りの中央部に平石２石を置いたもので、西側の石材の配置状態は枕石状を呈する。また配石墓２については、平石１石が墓壙の東寄りの中央部に置かれており、これについても枕石状に配されている。

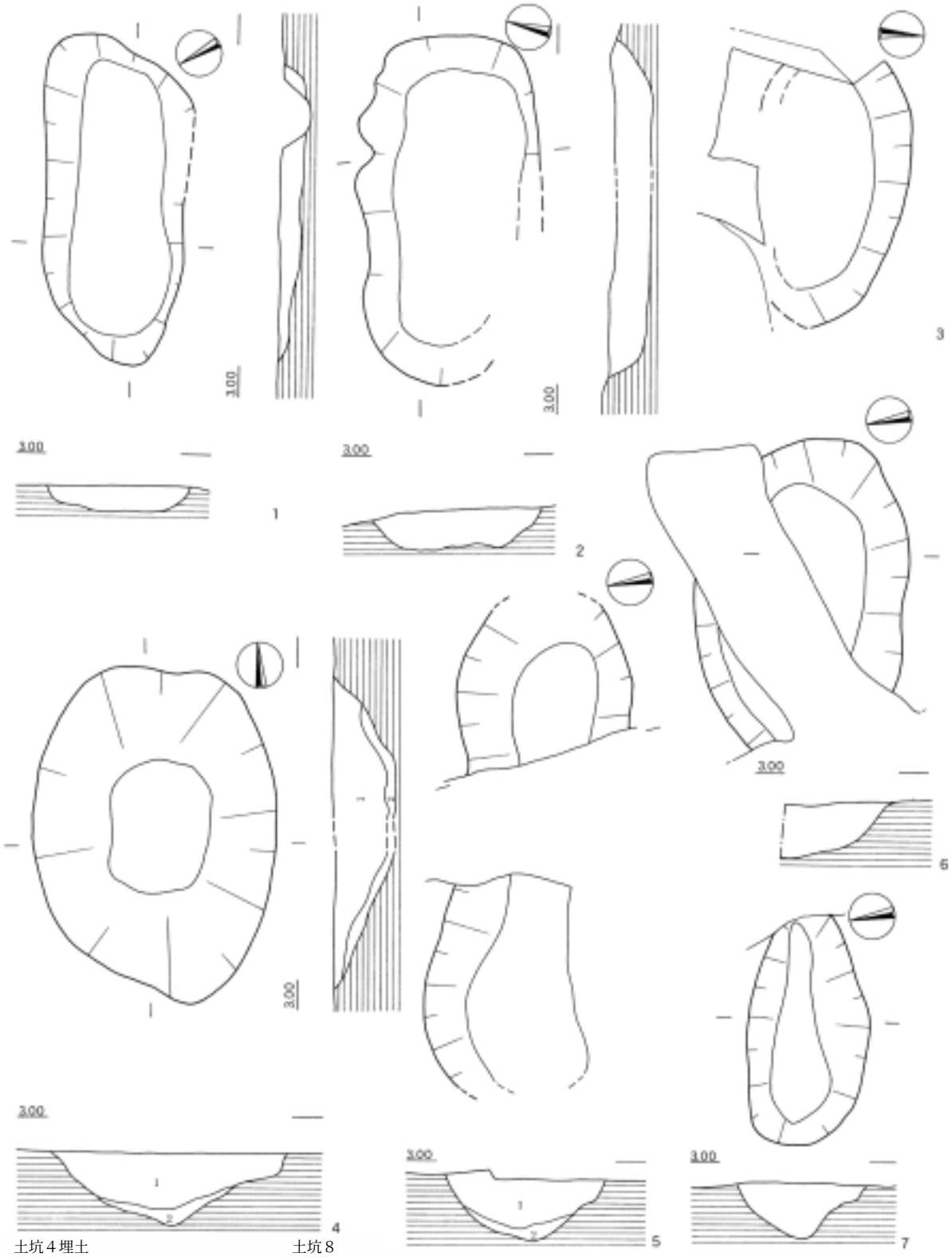
ただしこれら２例とも、平石は墓壙底から20cm程度浮き上がった状態であることが注意され、枕石と断定するにはいたらない。また配石墓４のような、墓壙の西側中央部付近に置かれ、墓壙側に斜めに傾く石材の配置状況をみると、それは枕石ではなく、遺骸の頭部上方を覆う形で配されたのではないかとも推測される状況である。



土壙墓３埋土
1　明黄褐色(10YR 6/6)砂質土　黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含む
2　明黄褐色(10YR 6/6)砂質土　黄灰色(2.5Y 5/1)を斑状に含む
3　黄褐色(10YR5/6)砂質土　黄灰色(2.5Y 5/1)を縦縞状に含み、第１層と比較してより砂質が強い

1：配石墓 12　　2：配石墓 13
3：土壙墓　1　　4：土壙墓 3
5：土壙墓　2　　6：土壙墓 4

図 16　配石墓(4)・土壙墓(1)



土坑４埋土
１明黄褐色(2.5Y 7/6)粘土
　黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含み、
　黒褐色(10YR3/1)を部分的に含む
２黄褐色(2.5Y 5/3)砂質土
　明黄褐色(2.5Y 7/6)粘質土を斑状に含み、
　黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含む

土坑８
１明黄褐色(2.5Y 7/6)粘土
　黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含み、
　黒褐色(10YR 3/1)を部分的に含む
２暗灰黄色(2.5Y 4/2)砂質土
　黄灰色(2.5Y 5/1)粘質土を縦縞状に含み、
　黒褐色(10YR 3/1)粘質土・暗黄褐色
　(2.5Y 7/6)粘土を部分的に含む

１：土壙墓５　２：土壙墓６　３：土坑１
４：土坑４　　５：土坑８　　６：土坑６　７：土坑７

0　2m

図17　土壙墓(2)・土坑(1)

２類の配石墓において副葬品の出土をみたのは配石墓４のみであり、ここからは碧玉製の管玉が１点出土した（図 35 － 12）。ただし配石墓４は、後述の土壙墓３の一部を切って構築されており、土壙墓３が11点の管玉を副葬品していることを勘案するならば、この管玉は土壙墓３からの混入である可能性も考慮しておくべきであろう。

このほか、配石墓１からは高坏が１点（図 27 － ６）、配石墓２からは壺形土器が４点（図 27 － １～４）、配石墓 10 からは壺形土器１点（図 27 － ９）がそれぞれ出土している。

３類の配石墓　配石墓６および配石墓８が本類に該当するが、配石墓６をみると、使用されている４石のうち最大のものは床面から 18㎝ 浮き上がった状態で、他の石材と組み合う状態でもない。こうした石材の使用法を合理的に解釈することは困難であるため、埋葬にあたっての儀礼的行為として、あるいは標石としての意図のもとに、石材が使用されることもあったのではないかと推定される。

本類型の配石墓において副葬品を伴うものや土器が共伴したものはない。

③　土壙墓

土壙墓は６基ある(図 16・図 17)。このほか土坑としたもののなかにも墓とみなしうるものが５基含まれるので、表３にはこれらを加えておいた。墓壙の規模や形態は配石墓と大差ない。したがって、木棺を使用するか否かといった埋葬方式や埋葬姿勢については配石墓と同一であった可能性もある。

このうち土壙墓３は、検出面が他のすべての遺構よりも低く、配石墓３と配石墓４の両者に切られており、その構築年代は墓域全体のなかでももっとも古く遡るものと判断しうる。この点を重視すれば、本墓域では土壙墓が原初的な埋葬形式であったといえるのかもしれない。

なお土壙墓１には、墓壙底からはかなり浮いた位置ではあるが、平石１石が使用されており、配石墓３類に含めて考えることも可能である。また埋葬主軸についてみれば、ほとんどが東西主軸を基本とするものであるが、そのなかにあって土壙墓５の主軸の振れは大きく、この要素にかんし孤立的な存在である。

これら土壙墓のうちで副葬品をもつものは１基、土器を伴うものは２基ある。土壙墓３からは管玉11点、石鏃８点が出土した（図 35 － １～ 11･21 ～ 24・26 ～ 28・31）。その出土状態は、管玉・石鏃ともに西側中央部に集中しており、管玉については墓壙底に接するものから 10㎝ 程度浮いた状態のものまでのばらつきがみられるが、石鏃についてはほとんどが墓壙底から7㎝程度浮いたところでみつかり、高さが揃った状態である（図 16 － ４）。またその一部には先端を下に向け直立した状態のものがみられた。墓壙の形態をみると、土壙墓３の頭位は西であった可能性が高いことから、これらの遺物は遺骸の頭から胸にかけての部分にあたるものと考えられる。

このうち管玉類は、装飾品として遺骸に装着されたのか、ばらまかれたのかは不明ながらも、副葬品と解釈して差し支えない。問題は石鏃のほうであるが、こうした出土状態を示すものに対しては、副葬品ではなく、人体に打ち込まれた鏃であろうと解釈される場合が多い。死因が特定できる貴重な事例だという訳である。

本例についても先端を下に向け直立した状態の石鏃がみられたことは、副葬品説を否定する根拠のひとつになる。そのため、本例もそうした特殊事例に加えることができるかもしれない。ただし本例については管玉との共伴関係をもつ点が気にかかる。全体的に副葬品類が稀少な状況のなかでの２者の共伴関係は、他の埋葬との差異をひときわ顕著にしているからである。

このほか土壙墓２からは壺形土器１点と甕形土器１点が出土し、土壙墓５からは鉢形土器が１点出土

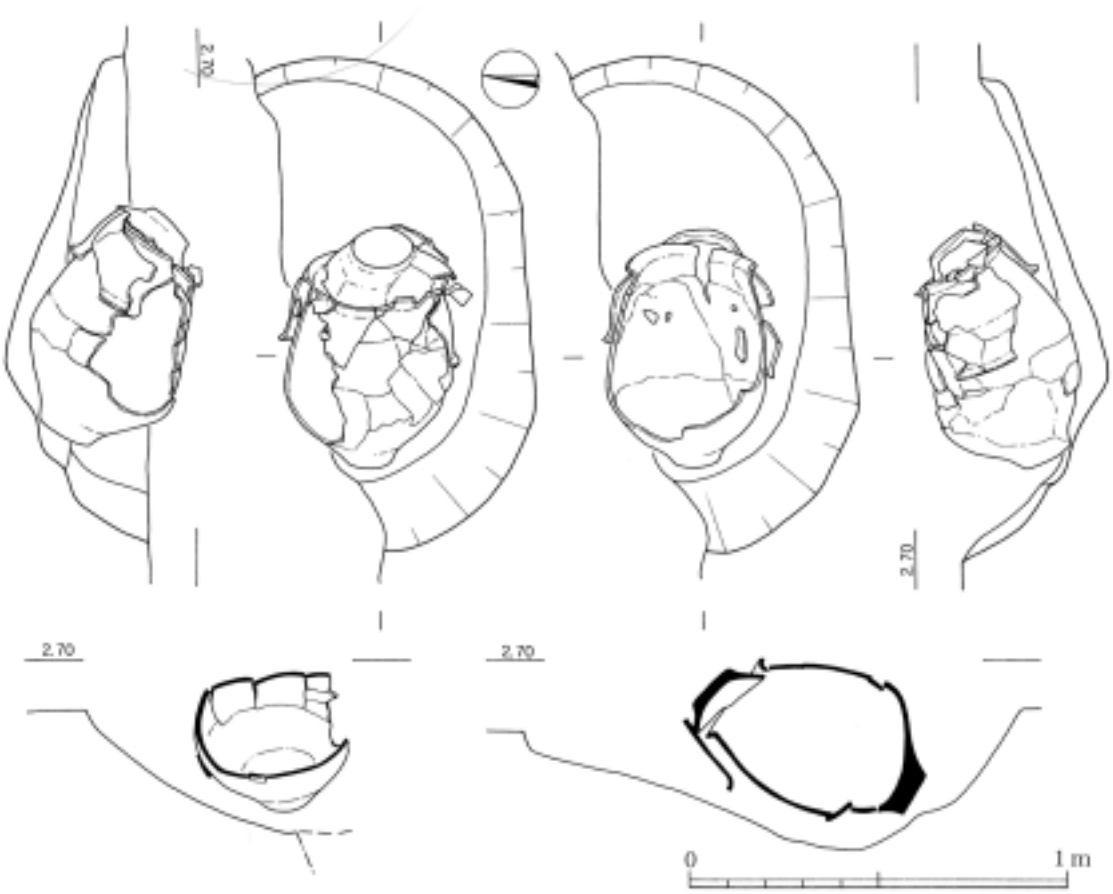


図 18　甕棺墓

した（図 27 － 10）。出土状態の詳細は不明ながら、これらについても副葬品の可能性がある。

④　甕棺墓

調査区の北辺で甕棺墓が１基のみ検出された（図 18）。現代の撹乱のため北側の一部が破壊されている。墓壙は長軸約 1.3 m、短軸推定約 1.0 m、深さ約 50.0㎝の楕円形である。この中に設置された甕棺は、壺形土器を棺身とし、鉢形土器を棺蓋とする。主軸の方位はＮ 83 ° Ｅ、埋置角度は水平から約 29 ° の傾斜を示す。棺身の接地面には直径約３ ㎝の円孔を穿っている。副葬品は認められなかった。

(2)　土坑

ここで土坑としたものは、ごく一部が遺存するだけで全体の形状や規模の不明なものや、不整形な掘り込みであったり主軸が南北を向いていたりと、埋葬施設と認定しうるには他の遺構との差異が顕著で判断材料が不足しているものが主体である。ただし墓域内であるという周囲の状況を勘案すると、先に土壙墓としたものと規模や形態の点で近似する土坑１・４・６・７・８については、やはり埋葬施設の可能性を考慮せざるをえない（図 17）。そのため、これら５基については暫定的ながら、先の表中に掲げることとした。

このほかの土坑については用途や意味が不明である（図 15・図 19）。いずれも遺存している部分については不整形な円形を呈する落ち込みであり、図 19 の土坑３についてみれば、南北 1.3㎜、東西 1.2㎜、深さ 42.0㎝をはかる。遺物を伴うものは土坑５のみであり、埋土中から完形の鉢形土器１点が出土した（図 20）。土坑全体の形状が不明であるため、詳細な検討は不可能であるが、本例については土坑内に

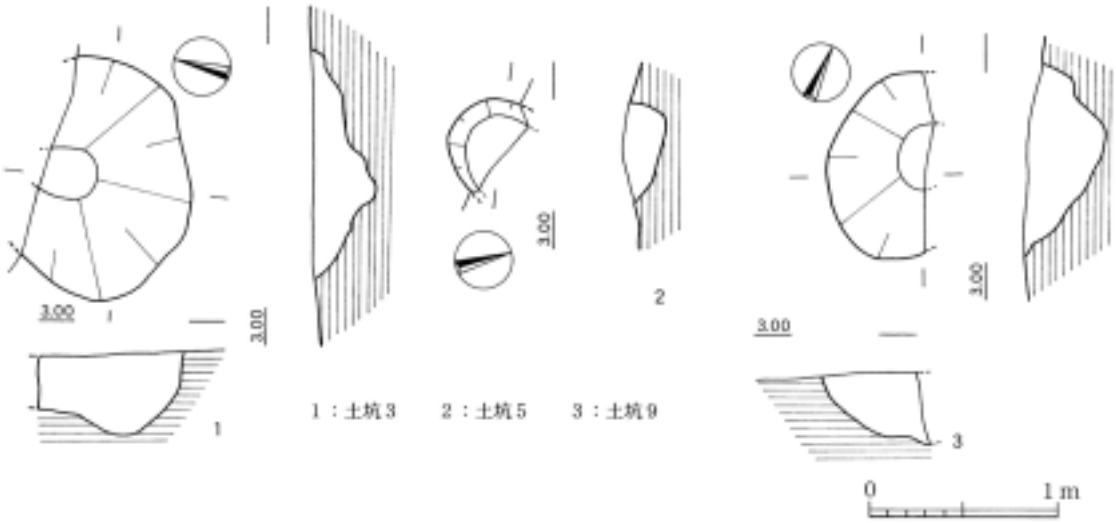


図19　土坑(2)

埋葬された状態だと考えられる。

以上の弥生時代前期中葉までに属する諸遺構は、第10層上面を検出面としており、調査時にはすべて第２遺構面として処理したものである。これに対し、以下報告する弥生時代中・後期の遺構および古墳時代以降の各遺稿については、いずれも第７層を検出面とするもので、第１遺構面として一括処理されたものである（図21）。

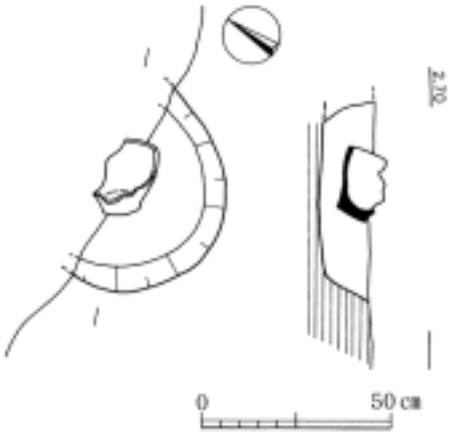


図20　土坑５の状況

３　弥生時代中・後期の遺構

(1)　溝

溝は７条確認されている。年代的位置づけに不明瞭なものも含まれるが、弥生時代中期から終末期にかけて機能したものと判断した。

溝１、溝２、溝４は、ともに調査区東端部付近で検出された浅い溝である（図22）。溝１は北北西から南南東に走るが、溝２と溝４は南北方向に走り、溝１は幅82.0㎝、深さ6.0～13.0㎝、溝２は幅70.0㎝、深さ10.0㎝、溝４は幅52.0㎝、深さ20.0㎝である。埋土は粘性の強いシルトが主体で、明らかな流水の形跡はみられない。埋土中からは土器の細片が出土したのみで、時期は不明である。ただし次に報告する溝５が、溝２と溝３を切った状態で延びているほか、土坑13などの土坑群がすべて溝２を切って掘削されているので、これら諸状況からみて、溝２については弥生時代後期以前と推定される。以下、主要な溝についての詳細を報告する。

溝５　調査区の南半部を東西に縦断する形で検出された（図22）。この溝は直線的に走ることが特徴であり、東端では南西に向かって直線的に10ｍほど延びたのち、屈曲して北西方向へと向かう。溝の規模は平均的な場所で計測して幅84.0㎝、深さ24.0～30.0㎝、断面形は「U」字形を呈するところと逆台形を呈するところとがある。

溝内からは土器の細片や石鏃がまばらに出土した。土器には甕形土器・壺形土器・高坏があるが、細

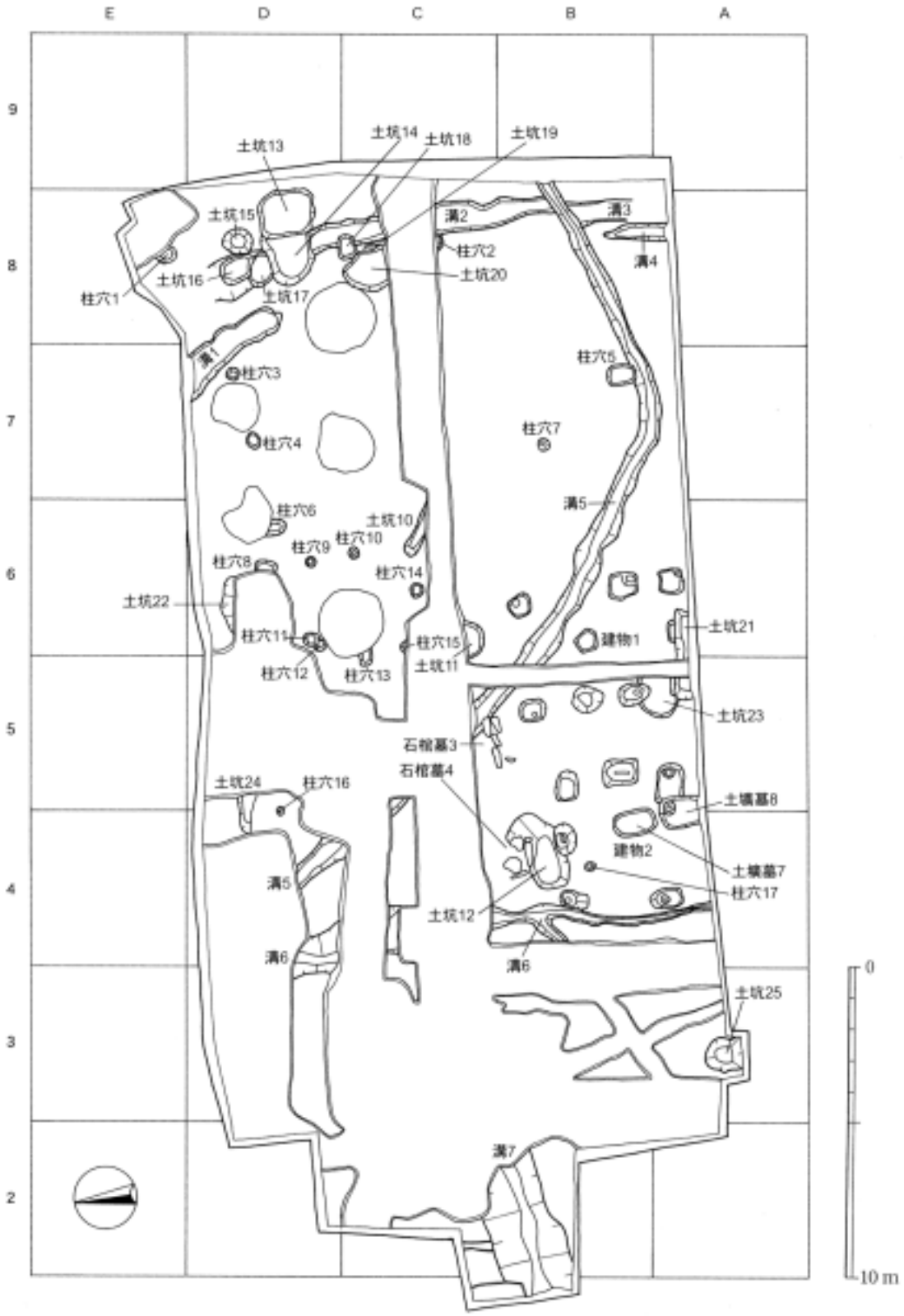
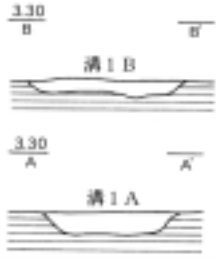
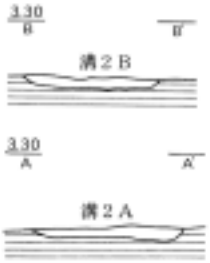


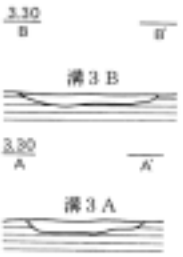
図 21　弥生時代中期以後の遺構配置



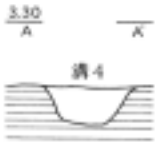
溝１Ａ・Ｂ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を50%以上、
　黄灰色(2.5Y 5/1)を僅かに含む



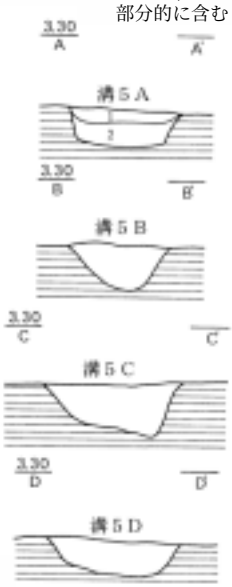
溝２Ａ・Ｂ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を斑状に、
　黄灰色(2.5Y 5/1)を縦縞状に含む



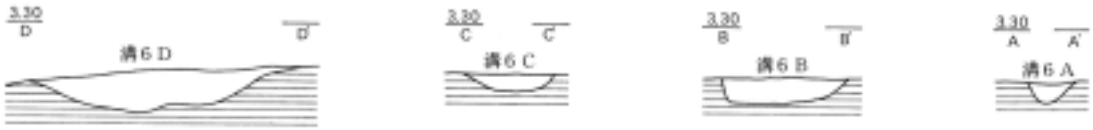
溝３Ａ・Ｂ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐(10YR 7/6)と
　黄灰色(7.5Y 5/1)を部分的に含む



溝４埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)と
　黄灰色(7.5Y 5/1)を
　部分的に含む



溝５Ａ埋土
１　黒褐色(5YR 5/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を15%、黄灰色(2.5Y 5/1)を
　部分的に含む　第１層と第２層の境目に土師器片あり
２　黄灰色(5YR 5/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を30%以上、黒褐色(5YR 5/1)
　を部分的に含む
溝５Ｂ埋土
黒褐色(5YR 5/1)粘質土
　明黄褐色（10YR 7/6)を25%、黄灰色(2.5Y 5/1)を
　部分的に含む
溝５Ｃ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を20%、黄灰色(2.5Y 5/1)を
　部分的に約３%含む
溝５Ｄ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を斑状に、黄灰色(2.5Y 5/1)を
　部分的に含む



溝６Ｃ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を斑状に、黄灰色(2.5Y 5/1)を
　部分的に含む　鉄の沈着有り
溝６Ｄ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を斑状に、黄灰色(2.5Y 5/1)を
　部分的に含む

溝６Ａ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　黄灰色(2.5Y 5/1)を部分的に含み、明黄褐色(10YR 7/6)はほとんど
　含まれない
溝６Ｂ埋土
黒褐色(5YR 3/1)粘質土
　明黄褐色(10YR 7/6)を斑状に、黄灰色(2.5Y 5/1)を部分的に含む
　鉄の沈着あり

0　1 m（断面図）
0　10 m（平面図）

図22　溝の状況

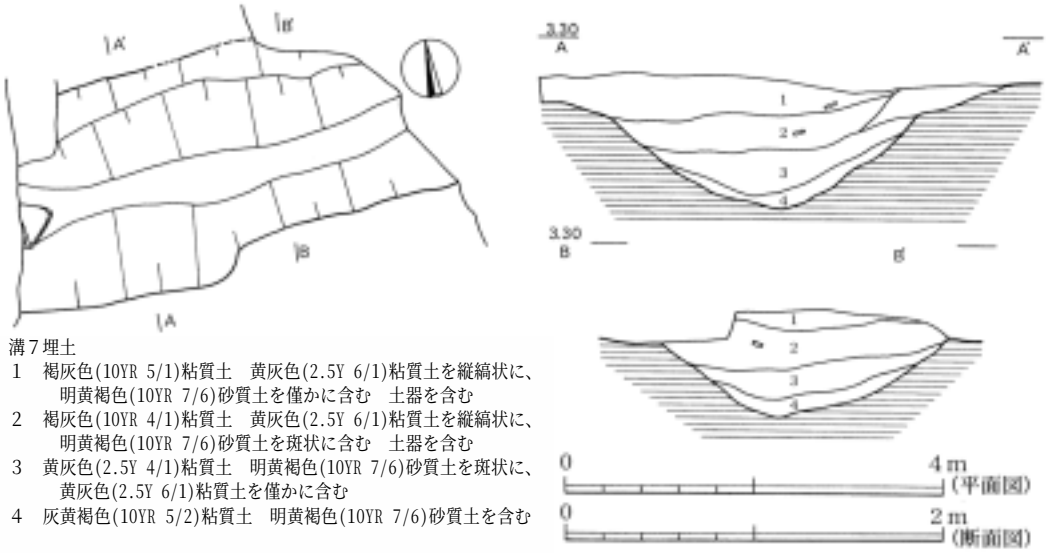


図23　溝７の状況

片のために図示しえない。年代的な位置については弥生時代終末期にあたるものと考えられる。これと同様の形態や規模の溝は当該時期の集落遺跡においてしばしば確認されるところである。したがって本溝も集落内の区画溝と考えられるのではあるまいか。

溝６　南北方向に走る浅い溝で、調査区の西半部を南北に横ぎる状態で検出された（図22）。北半部と南半部では溝幅が極端に異なっており、北半部での幅は1.5m、深さ20.0cmであるのに対し、南半部での規模は平均的な箇所で計測して32.0cm、深さ7.0～12.0cmをはかる。この溝が流路であるならば、その流水は南から北へと向かうはずであるので、この場合には下流側の溝幅が極端に広いと言い換えられるかもしれない。また北半部の規模は、次に報告する溝７と近似していることが注意される。撹乱のために分断されており検証は不可能であるが、あるいはそれと合流している可能性もある。

溝内からは比較的まとまった数の土器類が出土した。これらの土器類は弥生時代後期前半に属する。

溝７　調査区の西端部で検出された東西方向に走る溝である（図23）。検出面での幅2.2m、深さ60.0cm、掘り込みの肩は北側において２段になっており、上半部が緩やかで下半部がきつい。断面形はゆるやかな「U」字形を呈する。なお検出範囲より東側一帯には撹乱が広範囲に広がっており、溝６と連続する可能性は指摘できるが、本溝が実際にどのような状態で延びていたのかは不明である。

図24　溝５の全景

図25　溝７

埋土は４層程度に区分されるが、全体に粘性の強いシルトの堆積であり、流水の明瞭な形跡は認められない。２層中からは多量の土器が出土した。出土土器には弥生時代中期末に属するものと後期前半に属するものとが、それぞれ一定程度のまとまりをもって認められるので、土器の廃棄された年代は２時期に区分しうる可能性をもつ。

(2)　土坑

この時期に属する土坑は３基ある。

土坑10　詳細な図示を省くが、調査区中央付近で検出された溝状の細長い落ち込みで、幅40.0㎝、深さ30.0㎝をはかる（図21）。性格は不明ながら、埋土中からは高坏の脚部１点が出土した。

土坑11　先の土坑10の南西で検出された（図26－１）。撹乱で大半を消失しており、遺存していたのは南端部のみであった。現状での規模は東西1.2m、南北65.0㎝、深さ11.0㎝をはかる。埋土中からは土器類が比較的まとまった状態で出土した。これらの土器類は弥生時代後期前半に属するものと推定される。

土坑12　調査区南半部の西寄りの場所で検出された（図26－２）。石棺墓４および建物跡２の柱穴と重複した位置で発見され、これら２つの遺構に切られた状態であった。こうした重複関係のためか検出面での平面形は不整形であるが、床面は整った長楕円形を呈する。検出面での長軸方向の長さ2.6m、幅1.1m、深さ46.0㎝、断面形はU字形をなす。

埋土の上半部からは多量の土器片が破砕された状態で出土した。出土土器の所属年代は弥生時代後期中頃にあたる。

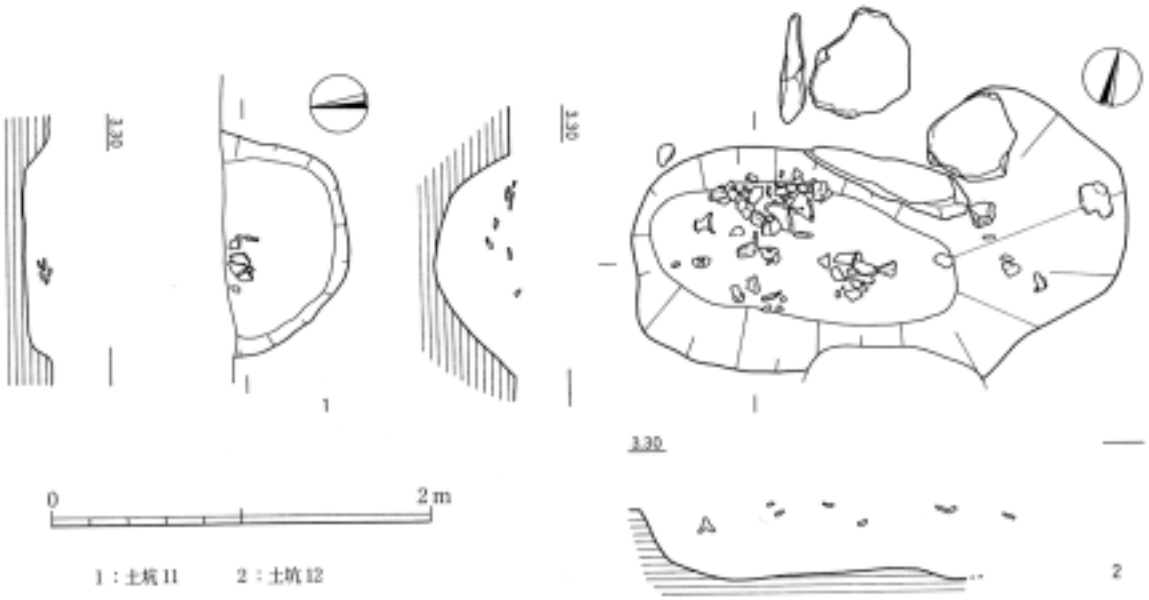
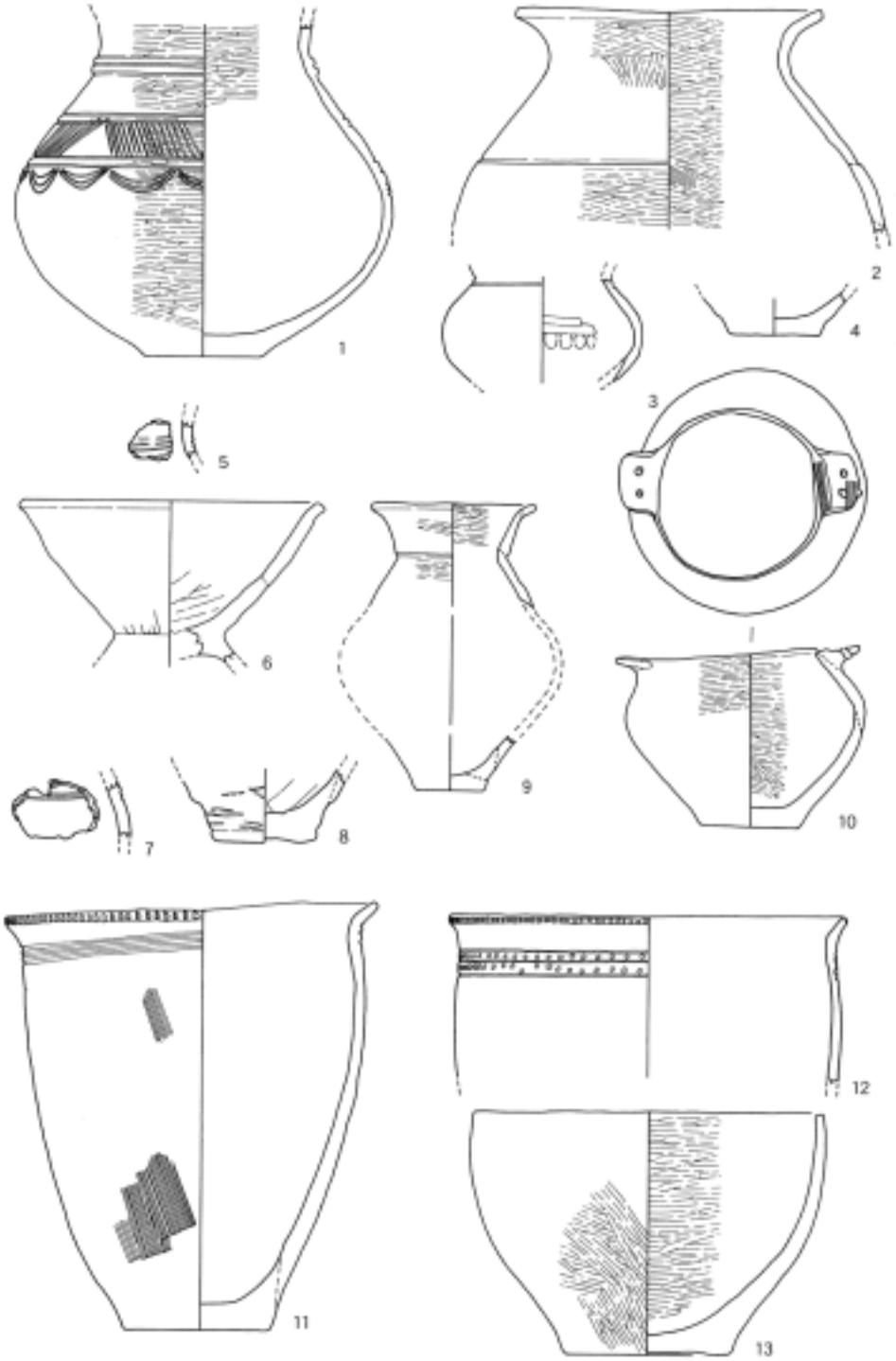


図26　土坑11・12の状況



１～４：配石墓２　　５　：配石墓７　　６　：配石墓１　７　：土壙墓２
８：土壙墓２　　９　：配石墓10　　10：土壙墓５　11：石棺墓２
12：不明遺構１　13：土壙５

図27　埋葬施設等出土土器

４　弥生時代の遺物

(1)　弥生時代前期の土器

当該時期の土器類としては埋葬施設への副葬・供献土器類や甕棺、および包含層出土のものがある。以下、遺構出土品と包含層出土品とに分けて個別の報告をおこなう。

埋葬関連遺構出土土器　図27には埋葬関連遺構出土の土器類を示した。

１～４は配石墓２出土の土器で、すべて壺形土器である。１は現高18.8㎝、胴部最大径20.9㎝をはかる。頸部と胴部の境界に削り出し突帯を施し、胴部に斜線文・重弧文を施す。内・外面とも丁寧にヘラミガキを施している。胎土中に結晶片岩がなく、多量の石英・長石を含むことから搬入品と考えておきたい。２は推定口径16.8㎝、推定胴部最大径24.2㎝をはかり、頸部と胴部の境界に沈線状の段を施す。内・外面ともに丹念にヘラミガキを施す。３は胴部最大径11.1㎝の小型品で、口縁部と頸部の境界に１条の沈線を施す。４は小型の壺形土器の底部である。いずれも前期前葉に属する。５は配石墓７から出土の壺形土器の頸部で、破線を施す。６は配石墓１から出土の高坏形土器である。口径16.0㎝で、やや風化している。時期の詳細は不明である。７・８は土壙墓２からの出土である。７は壺形土器の胴部、８は小型の壺形土器の底部である。時期の決定は難しい。９は配石墓10出土の小型の壺形土器である。口径9.1㎝、底径3.9㎝をはかり、口縁部と頸部の境界に外傾の接合面を利用した段を施す。内・外面ともに丹念にヘラミガキを施す。前期前葉に属する。10は土壙墓５から出土の鉢形土器である。口径8.7㎝、胴部最大径13.3㎝、底径5.5㎝、器高9.8㎝で、口縁部に１対の把手を配し、各２孔の紐孔を施す。外傾接合によって製作され、風化が顕著である。時期の詳細は不明である。11は石棺墓２出土の

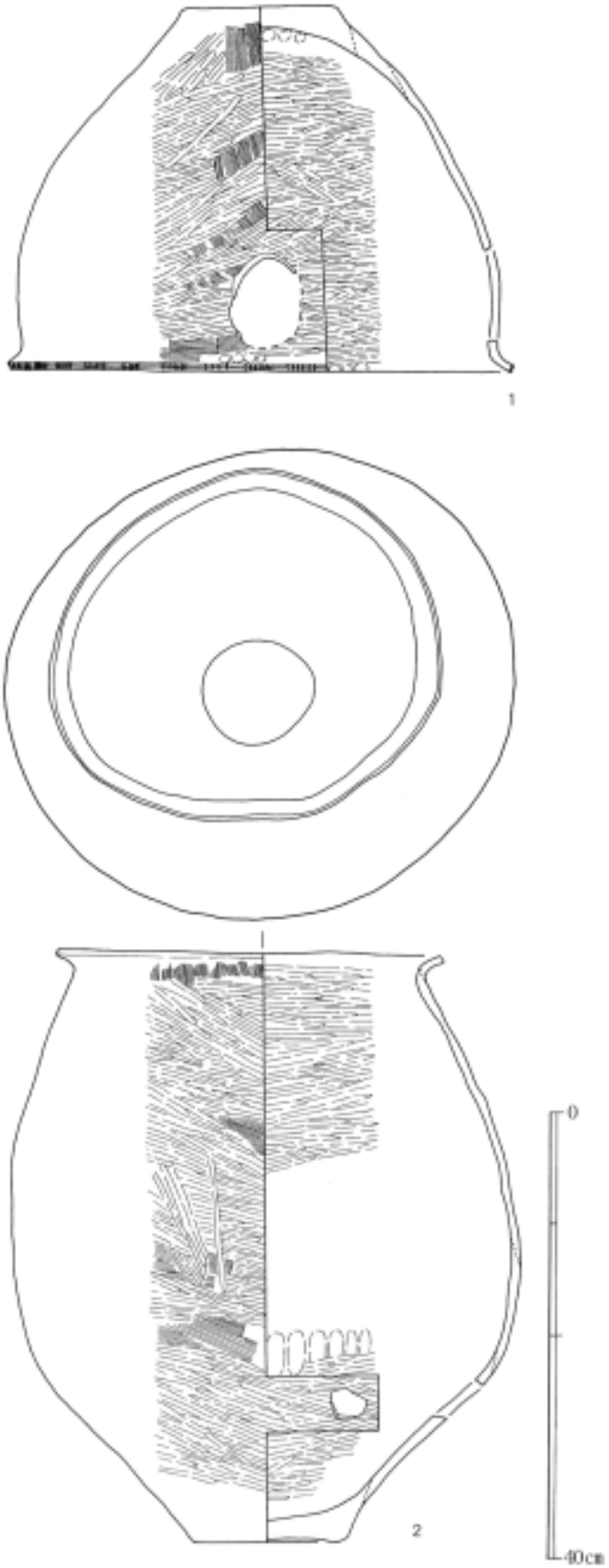


図28　甕棺

甕形土器である。口径21.2㎝、器高23.6㎝で、胴部に３条の沈線を施す。時期は前期前葉～中葉であろう。12は不明遺構１出土の甕形土器で、推定復元口径は22.0㎝。胴部に３条の沈線を施し、その間に刺突文を加える。刻目を口縁外端に施す特徴からみて前期前葉であろう。13は土坑５出土の鉢形土器である。椀型の器形で、口径19.5㎝、底径9.1㎝、器高13.5㎝をはかる。鮮やかな赤褐色を呈し、胎土に赤色顔料を加えた可能性がある。また、黒斑は木葉状を呈し、あたかも文様を意識したかのようである。内・外面から底面にいたるまで丁寧にヘラミガキを施す。結晶片岩を含有する地元産の土器で、朝鮮無文土器・弥生時代前期土器ともに類似した形態を認めることができる。時期の詳細は不明である。

以上の土器のうち１～10・13は、小型で丹念にヘラミガキを施したものが多いことから副葬・供献されたものであろう。このように、特殊な土器が単品で出土する事例については時期の決定が困難である。しかし、段などの古い要素を持つものが多いため、大半は前期前葉で、一部前期中葉に属するとみてよいだろう。また、確実に前期後葉まで下がる資料は存在しない。

甕棺　図28に実測図を示した。１は鉢形土器の転用棺蓋である。口径44.5㎝、器高32.5㎝、底径14.0㎝をはかる。口縁端部には沈線を施したのち、４～７個を１単位とした刻みを加える。また、焼成後胴部上半に穿孔を施す。内・外面ともにハケメののち丹念にヘラミガキを施す。２は甕棺の身として利用された壺形土器である。俯瞰すると楕円形を呈しており、口径は長径34.1㎝、短径30.5㎝、胴部最大径は長径45.1㎝、短径42.0㎝で、底径13.0㎝、器高53.0㎝をはかる無文の土器である。内･外面ともにハケメのちヘラミガキ仕上げで、焼成後胴部下半に穿孔を施す。弥生時代前期の土器に類例を求めることは困難で、器形はむしろ朝鮮無文土器に類似している。胎土に結晶片岩をふくむ地元産の土器のため断定はさけておきたいが、形態のみに着目し、あえて比定するなら藤口健二の松菊里Ⅰ式（藤口1986）、家根祥多の松菊里式（家根1996）に相当するのではあるまいか。鮮やかな赤褐色を呈しており、胎土に赤色顔料を加えた可能性がある。また、他の資料に比して焼成はきわめて良好である。時期を決定するのは困難であるが、層位・周辺遺構の時期からみて前期前葉～中葉に属するとみられ、前期後葉まで下がることはないだろう。

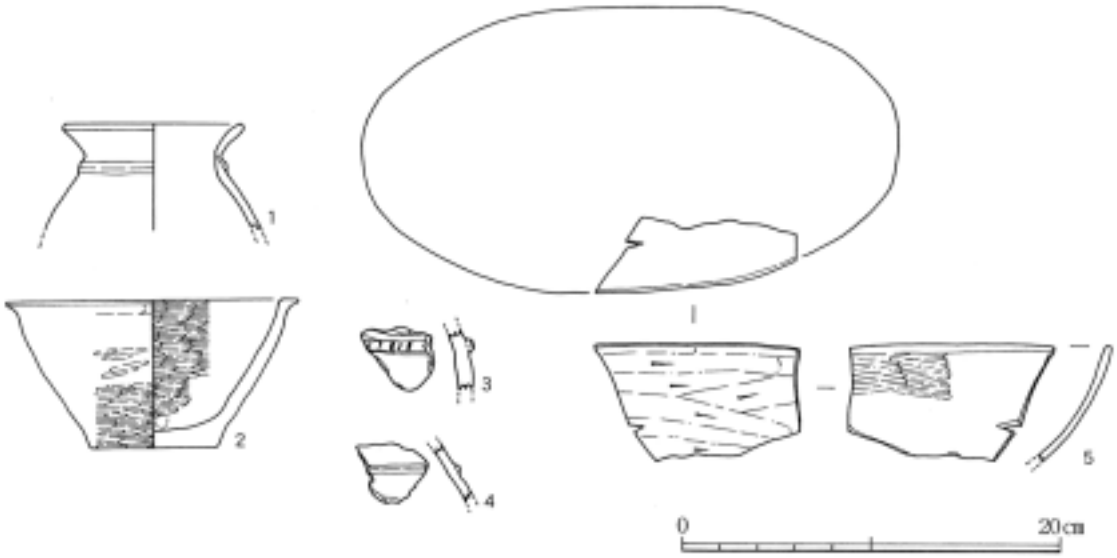


図29　包含層出土土器(1)

包含層出土土器　図29は包含層から出土した弥生時代前期の土器である。１・３・４は壺形土器、２は鉢形土器で、５は縄文時代晩期の流れをくむ浅鉢形土器であろう。１は壺形土器で、推定口径9.2㎝の小型品である。口縁部と頸部の境界に削り出し突帯を施す。３・４は壺形土器の胴部で、貼り付け突帯を施す。突帯文土器の影響を受けた古いタイプの突帯であろう。２は鉢形土器で、推定口径15.4㎝、推定底径6.6㎝、器高7.8㎝をはかる。内・外面・底面とも丹念にヘラミガキを施す。口縁端部を外側につまみ出すことによって断面三角形とする。５の浅鉢形土器は、胴部のひずみ具合から楕円形に復元した。内面にヘラミガキ、外面にヘラケズリを施す。暗褐色を呈し、結晶片岩を含まないが、角閃石を含む。搬入品であろう。

以上の資料はおおむね前期前葉に属するものであり、前期後葉まで下がる資料は存在しない。

（２）　弥生時代中・後期の土器

溝と土坑からの出土品がある。図30には溝４、溝５、溝６出土の資料を示した。１～11までが溝６、12～14までが溝５、15～17までが溝４出土品である。

溝６出土土器　甕形土器（１・３・４・５）、鉢形土器（２）、高坏（６～11）がある。１は甕形土器で、推定口径16.0㎝、口縁部は外湾気味に開き、端部をわずかに肥厚させ、側面に１条の擬凹線が巡る。器面調整は外面ハケメ仕上げ、内面は胴部上端までヘラケズリがおよぶ。２は鉢形土器で、推定口径34.3㎝の比較的大型の個体である。口縁部に強いナデを施し、受け口状に外反させる。器面調整は内外面ともにハケメ仕上げである。高坏は７・９・10が坏部片で６・８・11が脚部片である。ただし７については鉢形土器の可能性もある。10は推定口径22.9㎝、坏部上半が外反するタイプである。器面調整は外面ヘラ

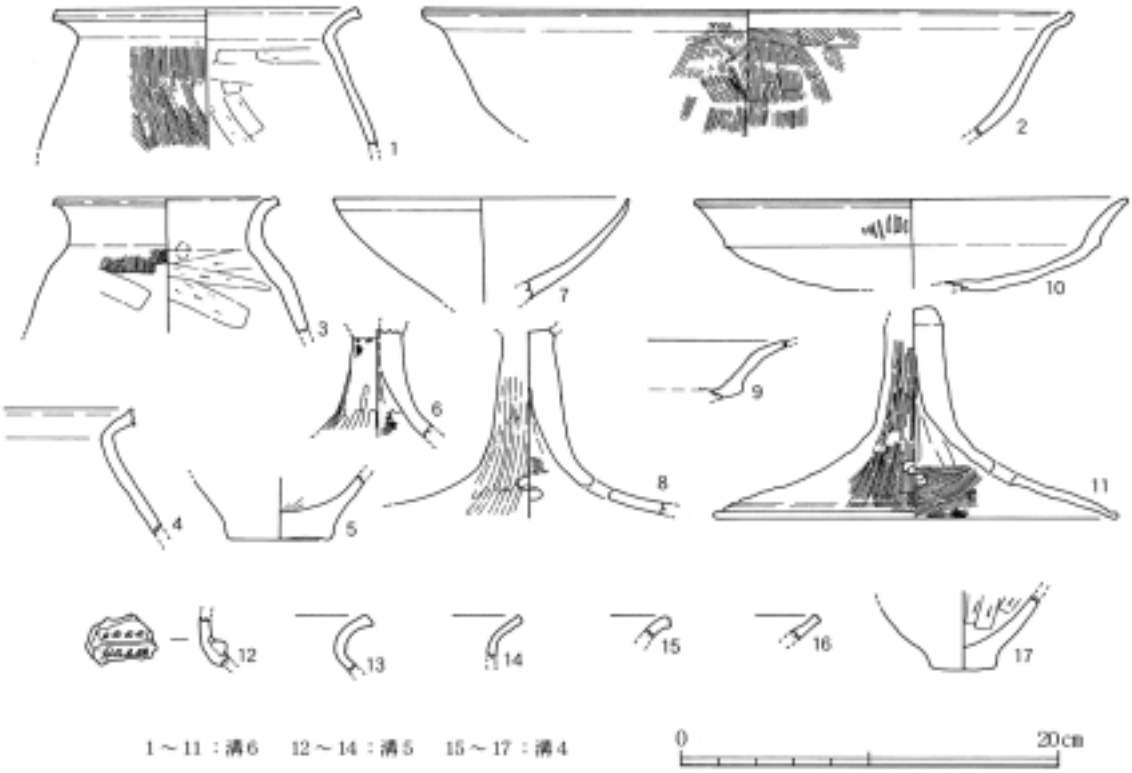


図30　溝４・５・６出土土器

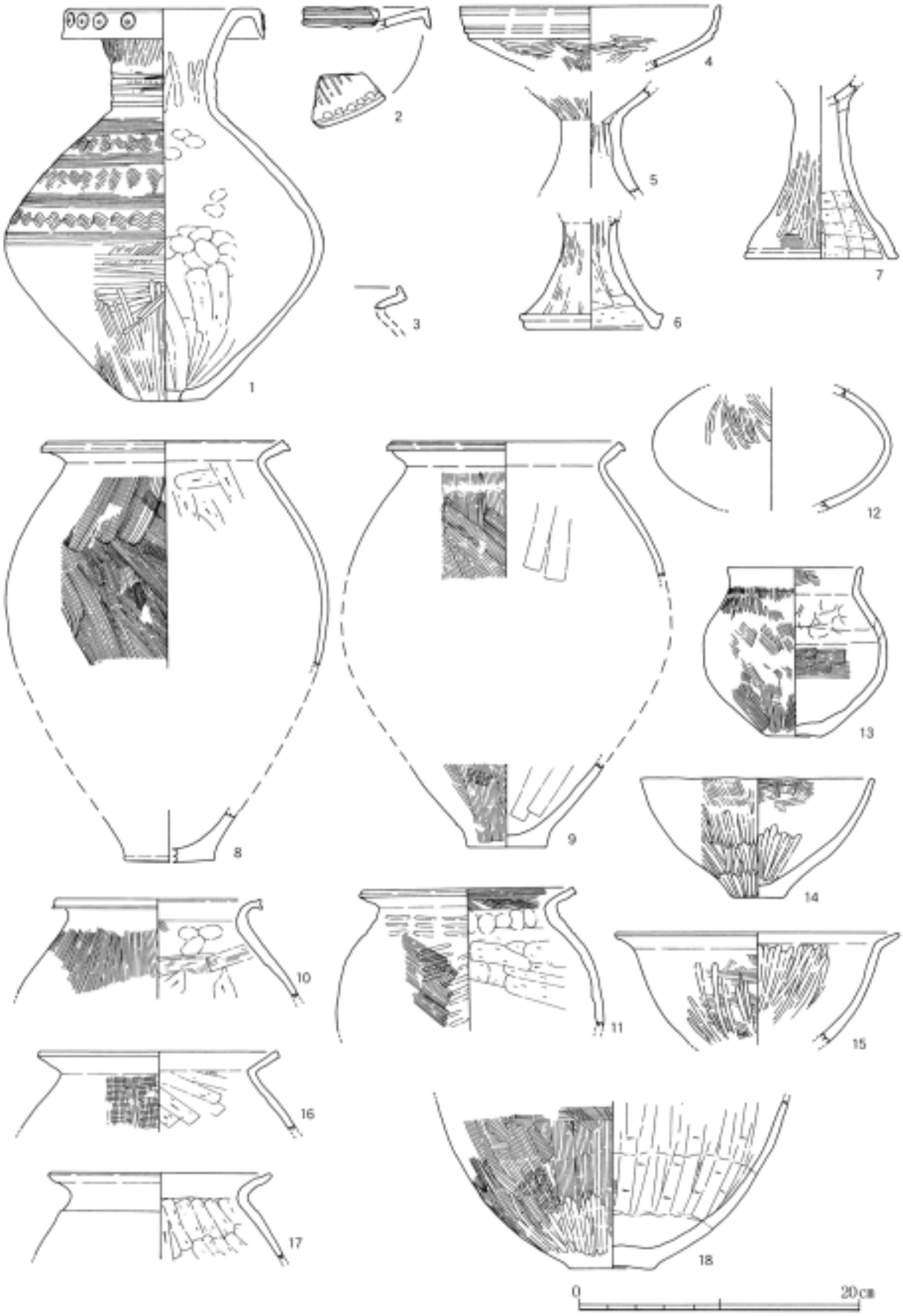


図31　溝7出土土器(1)

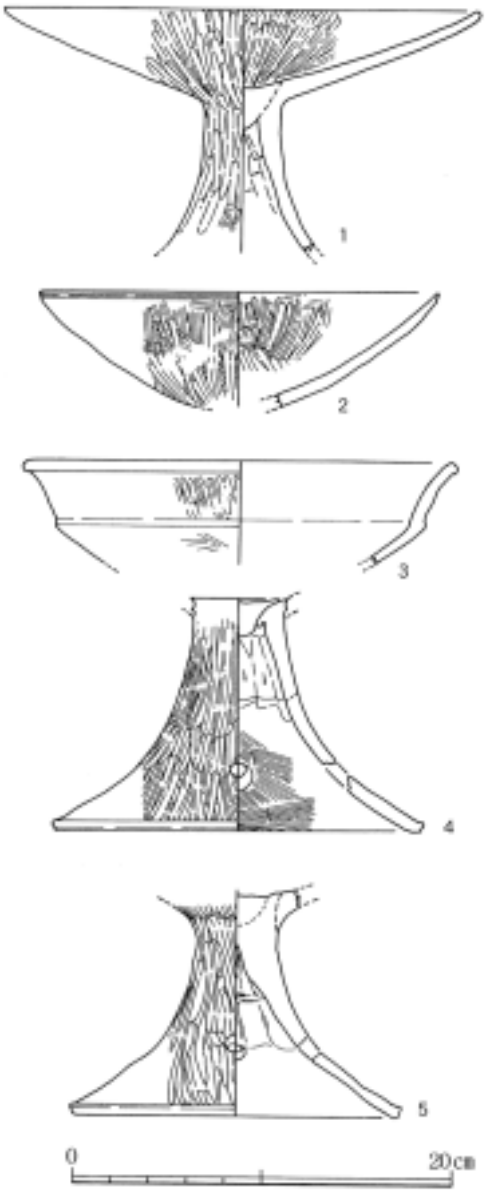


図32　溝７出土土器

ミガキ。11は現高11.0㎝の脚部片で脚端部には３条の浅い凹線を巡らす。器面調整は外面ヘラミガキ、内面ハケメ仕上げである。

溝５・溝４出土土器　12は壺形土器の頸部片で貼り付け突帯に連続刺突文が施されている。13～15までは甕形土器の口縁部片である。17は鉢形土器の底部片で小型の個体であろうと思われる。

溝６出土の土器類を概観すると、甕形土器や高坏などに弥生時代後期前半の特徴がみられ、当該期のものと判断できる。また溝５および溝４出土資料についても、やや不確定的ではあるが、相前後した時期のものととらえたい。

溝７出土土器　図31と図32には溝７出土土器を示した。図31の１から７までの１群と、同図の８～18、および図32に示した１群とに区分可能である。前者は弥生時代中期の資料、後者は弥生時代後期の資料である。

図31の１は高さ28.3㎝、口縁部径14.0㎝、胴部最大径23.2㎝をはかる壺形土器で、口縁部は垂下口縁となり側面に４個単位の円形浮文を施す。頸部には４条の凹線を施し、胴部には櫛描き波状文と沈線文とを交互に巡らす。胴部の波状文帯は３段であるが、施文は粗雑である。器面調整は外面縦ハケのちナデ仕上げで、胴部下半にはヘラミガキを施す。内面は上半部ナデ仕上げ、下半部はヘラケズリである。底部には焼成後の穿孔があり、その直径は約２㎝をはかる。２と３は壺形土器と甕形土器の口縁部片である。２の口縁端部側面には沈線が施されていること、３の口縁端部は屈曲気味に上方へ立ち上がることがわかる。４・５・６・７は高坏である。４の推定口径は18.9㎝、坏部側面には３条の沈線が巡り、下面には丁寧なヘラミガキがおよぶ。７は脚端部に段やかえりをもたず、端部には１条の浅い沈線が巡る。８～11、16・17は甕形土器である。口縁部形態によって、８～11までの口縁端部を肥厚させ凹線ないし擬凹線を施すタイプと、端部を肥厚させず、丸くおさめる16・17のタイプとがある。８は推定高30㎝前後、口縁部径17.2㎝、胴部最大径22.0㎝をはかる。９は推定高29.0㎝、口縁部径16.2㎝である。いずれも口縁端部は外傾気味であり、端面に２条の擬凹線を施している。10と11は口縁部側面に１条の擬凹線ないし強いナデによる窪みを施すもので、10の口縁部の屈曲は他の資料と異なり、稜をもたない。16・17を含め、器面調整は均質的で、外面はタタキのちハケメ仕上げ、内面は口縁部付近までヘラケズリがおよぶ。12・13は壺形土器である。このうち12は直口壺の胴部片であり、推定胴部径は17.1㎝になる。14・15は鉢形土器である。14は高さ8.6㎝、口径16.4㎝をはかる。精良な胎土で内外面ともにヘラミガキ仕上げである。15は口縁部端部が直線的に開くタイプのもので、復元口径は22.0㎝である。18は壺形土器の底部片であるが形態の詳細は不明である。

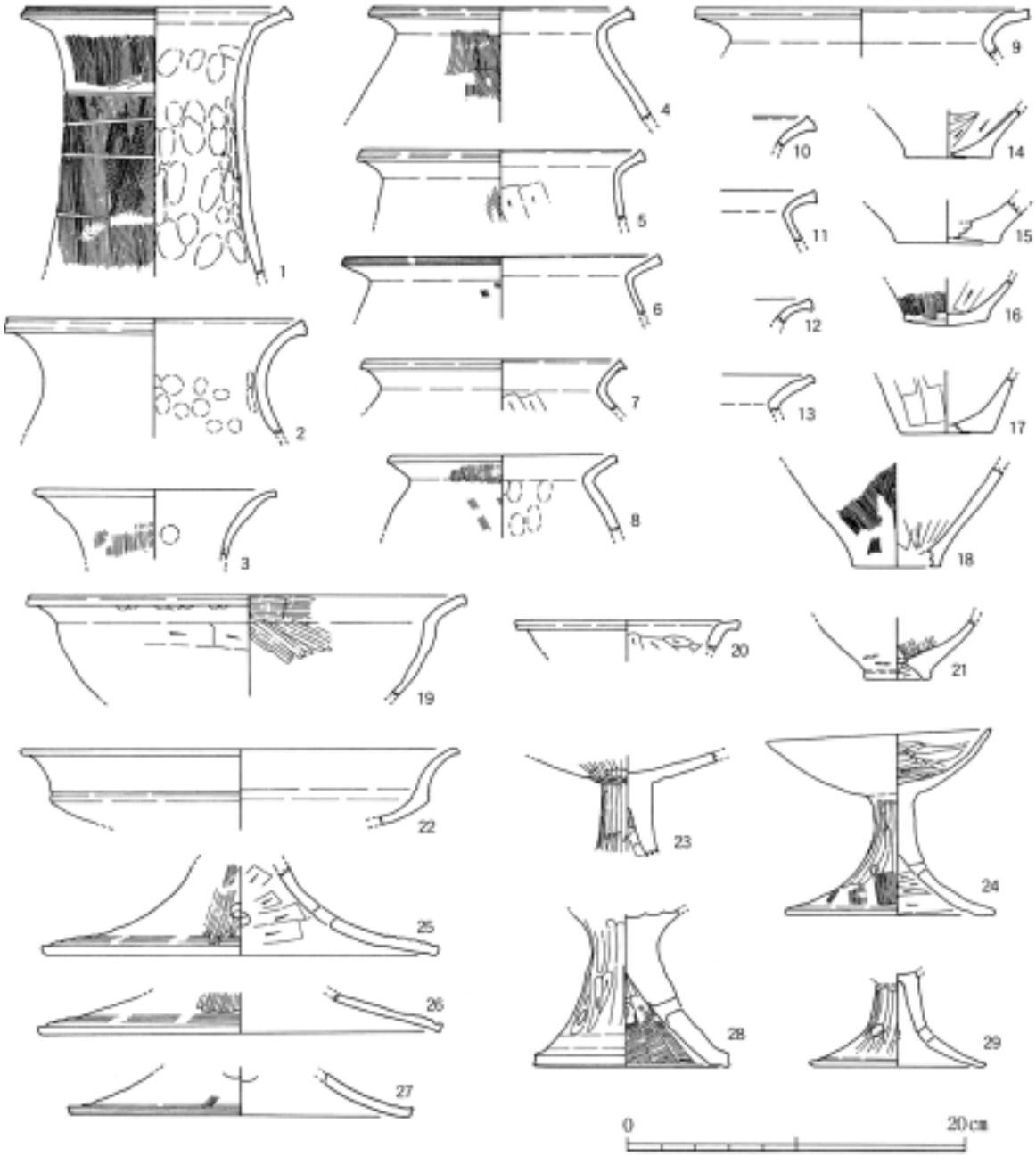


図33　土坑12出土土器

図32に示したものは高坏である。坏部の形態が１・２のような内湾気味に立ち上がるタイプのものと、３のような上半部が外反するタイプのものとに分けられる。制作技法の点からみれば、前者は後者の坏部上半部の積み上げ工程を省略した形態とみなしうる。１の口縁部径は25.1㎝、３の口縁部径は22.5㎝である。４・５は脚部であるが、ともに下半部には円形の透かし孔を施す。脚端部にはかえりをもたないが、端面はわずかに肥厚させ、強いナデによって端面に面取りを施している。坏部との接合は組合せ式であるが、４では円盤充填式の名残をとどめている。

土坑12出土土器　図33に土坑12からの出土品を示した。１～３までが壺形土器、４～18は甕形土器、19～21は鉢形土器、22～29は高坏である。壺形土器のうち、１は推定口径15.5㎝の長頸壺で、頸部

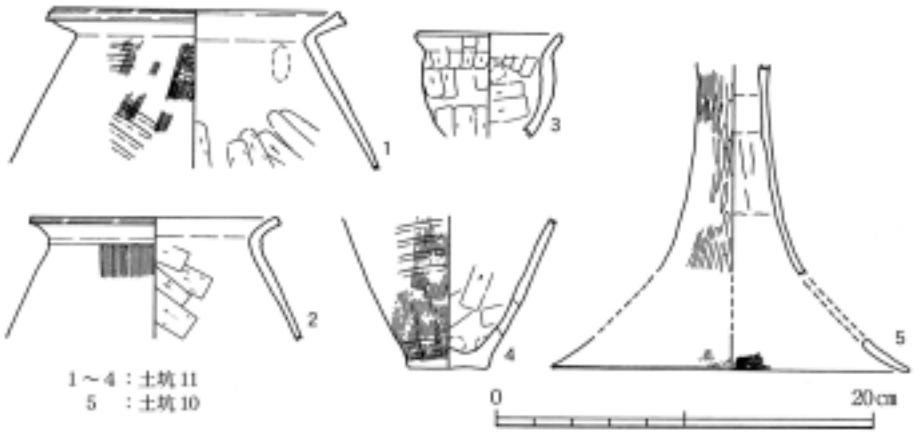


図34　土坑10・11出土土器

に箆描き沈線を螺旋状に巡らす。香川県産の搬入品である。甕形土器は破片が主体であるために外形の判明するものはない。このうち４は推定口径15.0㎝、「く」の字状に開く口縁部の端面には擬凹線を施す。鉢形土器は３個体を確認できる。19は推定口径25.5㎝、口縁部は外反し、端面は面取り状におさめられる。高坏には、22のような坏部上半部が外反するものと、24のように坏部が椀状に立ち上がるものとがある。脚部は高さ10㎝程度に復元されるものが多く、坏部との接合は組合せ式のものだけである。28のように脚部の厚みがかなりあるものもみられる点が注意を引く。

土坑10・11出土土器　図34に示したのは土坑11からの出土品（１～４）および土坑10からの出土品（5）である。土坑11出土品は甕形土器と鉢形土器で、土坑10出土品は高坏である。１は復元推定径15.4㎝、「く」の字状に開く口縁部は、その端部を肥厚させ、端面に２条の凹線を巡らす。器面調整は外面タタキのちハケメ仕上げで、内面は胴部上半部までヘラケズリがおよぶ。３は小型の鉢形土器で、口縁部を外方に屈曲させる。器面調整は内外面ともに粗いヘラケズリである。５は薄手の脚部で、現高16.3㎝、裾部は徐々に厚みを減じ、端部は丸くおさめる。

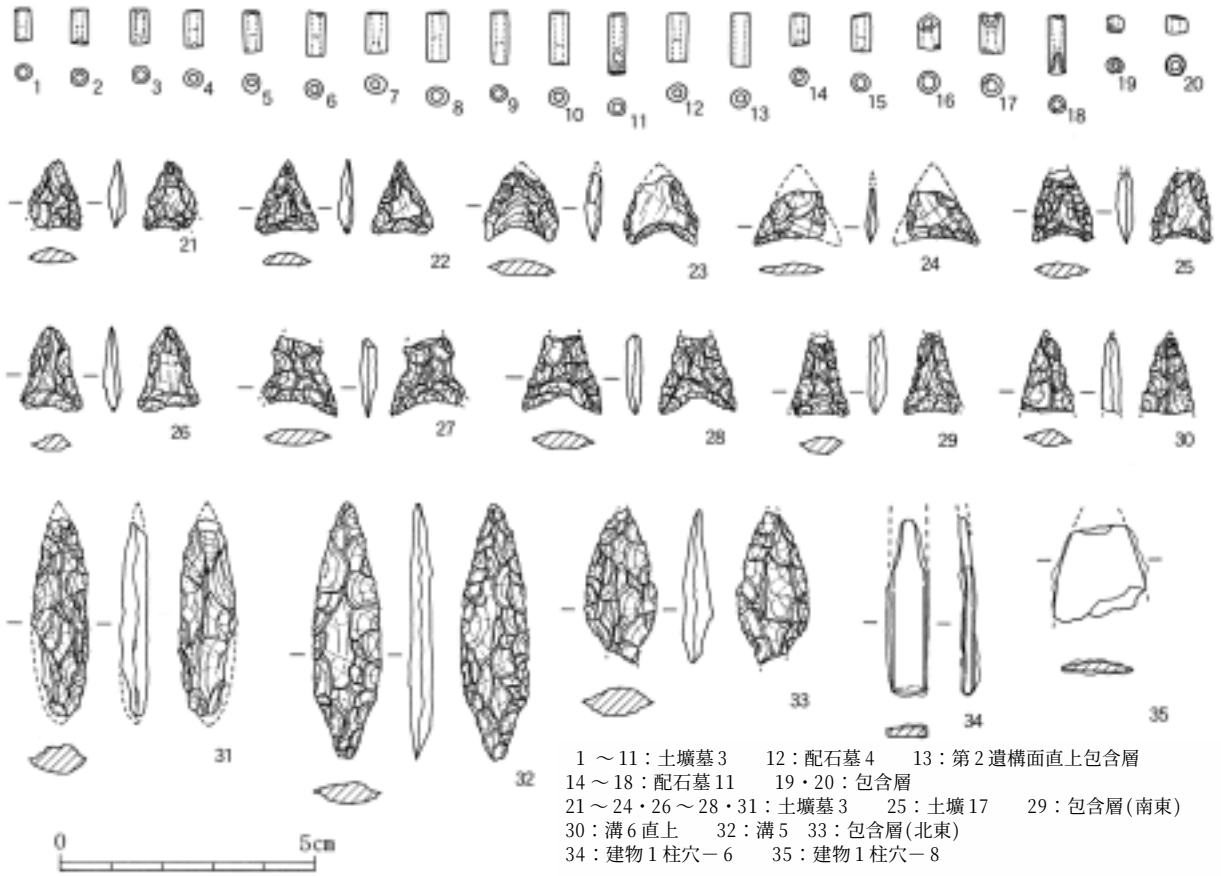
包含層出土土器　包含層からも若干の弥生土器が出土しており、このうち実測可能なものについては図47に示した。２は壺形土器の頸部片である。胴部と頸部の境界に貼りつけ突帯を巡らし、上下２段に刺突文を刻む。時期は不明である。３・４は甕形土器の口縁部片である。３は復元口径16.0㎝、「く」の字状に開く口縁部の側面には面取りを行う。４は復元口径17.6㎝、口縁端部を肥厚させる。２点ともに弥生時代後期前半の時期に属するものと思われる。5は鉢形土器の底部で、6は甕形土器の底部片である。時期の詳細はともに不明である。

土器の年代　以上の土器類のうち、溝７出土品と土坑12出土品は弥生時代後期の比較的良好な一括資料である。これら相互の年代的位置づけにかんしては溝７のものをやや古相、土坑12のものを新相と把握することが可能である。香川県埋蔵文化財センターの大久保徹也氏に鑑定を依頼したところ、図33－１の壺形土器は高松平野香東川流域産の下川津Ｂ類（大久保1990）に属する土器であり、丸亀平野の下川津Ｉ式期併行であるとの教示をえた。徳島県域では菅原康夫・大西浩正編年案（菅原1986、大西1990）の黒谷川Ｉ式併行期にあたるので、土坑12の資料は黒谷川１式に属するものと考えて差し支えないようである。とすれば、古相を示す溝７の資料は黒谷川Ｉ式に先行する弥生時代後期前半の資料とみなすことができよう。近年提示された近藤玲編年案（近藤1996）の後期Ｉ－２期に比定しうる。

表４　玉類一覧表

No.	出土遺構	形式	材質	長	幅	重量	孔径	備考
1	土壙墓３	管玉	碧玉	6.6	3.3	0.10	2.0	両面穿孔
2	土壙墓３	管玉	碧玉	7.2	3.6	0.14	1.9	両面穿孔　端部角欠損上研磨
3	土壙墓３	管玉	碧玉	7.2	3.7	0.15	2.0～1.8	両面穿孔　側面の一部に扁平面あり
4	土壙墓３	管玉	碧玉	7.6	3.7	0.15	2.2～1.9	両面穿孔　端部角欠損上研磨２ヶ所
5	土壙墓３	管玉	碧玉	8.3	3.8	0.18	1.8～1.5	両面穿孔　扁円形
6	土壙墓３	管玉	碧玉	9.2	3.6	0.19	1.8	両面穿孔
7	土壙墓３	管玉	碧玉	8.2	4.3	0.21	2.4～1.8	両面穿孔
8	土壙墓３	管玉	碧玉	10.0	4.4	0.28	2.2	両面穿孔　断面楕円形
9	土壙墓３	管玉	碧玉	10.5	3.5	0.20	2.1	両面穿孔
10	土壙墓３	管玉	碧玉	10.6	3.9	0.25	2.0	両面穿孔
11	土壙墓３	管玉	碧玉	12.3	3.5	0.24	2.0	両面穿孔　側面の一部に扁平面あり
12	配石墓４	管玉	碧玉	9.6	3.8	0.24	1.9	両面穿孔　配石墓４は土壙墓３上面を切る
13	第２遺構面直上包含層（北東端）	管玉	碧玉	11.1	3.9	0.23	2.0～1.5	片面穿孔
14	配石墓11	管玉	碧玉	6.2	3.7	0.13	1.7	両面穿孔　端部角欠損上研磨２ヶ所
15	配石墓11	管玉	碧玉	7.7	3.9	0.18	2.0	両面穿孔
16	配石墓11	管玉	碧玉	6.6	4.6	0.15	2.7～2.2	両面穿孔　破断面一部研磨
17	配石墓11	管玉	碧玉	7.9	4.6	0.24	2.5～2.3	両面穿孔　破断面・欠損部上研磨
18	配石墓11	管玉	碧玉	12.0	3.6	0.21	2.0～1.5	両面穿孔　破断面上端研磨　端部角欠損上研磨
19	包含層（北東）	小玉	ガラス	3.4	3.4	0.04	1.6～1.3	両スカイブルー（風化）　気泡あり
20	包含層（南西）	小玉	滑石	3.5	2.4	0.09	2.0	胴張り

長・幅・孔径の単位はｍｍ、重量の単位はｇ



1 ～11：土壙墓３　12：配石墓４　13：第２遺構面直上包含層
14～18：配石墓11　19・20：包含層
21～24・26～28・31：土壙墓３　25：土壙17　29：包含層(南東)
30：溝６直上　32：溝５　33：包含層(北東)
34：建物１柱穴－６　35：建物１柱穴－８

図35　玉類・石鏃・鉄製品

表５　石鏃一覧表

No.	出土遺構	形式	材質	長	幅	重量	備考
21	土壙墓３	平基式	サヌカイト	14.0	10.0	0.3	基部欠損
22	土壙墓３	平基式	サヌカイト	15.0	12.0	0.3	
23	土壙墓３	凹基式	サヌカイト	(13.5)	15.0	(0.5)	先端部欠損
24	土壙墓３	凹基式	サヌカイト	(10.0)	13.0	(0.3)	先端部・基部欠損
25	土坑17	凹基式	サヌカイト	(14.0)	12.0	(0.4)	先端部欠損
26	土壙墓３	凹基式	サヌカイト	16.5	12.0	0.4	
27	土壙墓３	凹基式	サヌカイト	(16.5)	15.0	(0.6)	先端部欠損・基部欠損
28	土壙墓３	凹基式	サヌカイト	(15.5)	15.5	(0.7)	先端部欠損
29	包含層（南東）	平基式	サヌカイト	(14.5)	10.5	(0.5)	先端部欠損・基部欠損
30	溝６直上	凸基式	サヌカイト	(39.0)	11.0	(2.3)	先端部片
31	土壙墓３	凸Ⅱ基式	サヌカイト	(50.5)	13.5	(3.0)	先端部・基部の一側面欠損
32	溝５	凸Ⅱ基式	サヌカイト	50.5	13.5	3.0	
33	包含層（北東）	凸Ⅰ基式	サヌカイト	(29.5)	14.0	(2.0)	先端部・基部わずかに欠損

型式分類は松木武彦 1989 による。括弧付き数字は残存値。長・幅の単位は㎜、重量の単位はｇ。

(3)　弥生時代の玉類・石器類・鉄器類

①　玉類

本調査区出土玉類には管玉 18 個、小玉２個がある（図 35 －１～20）。

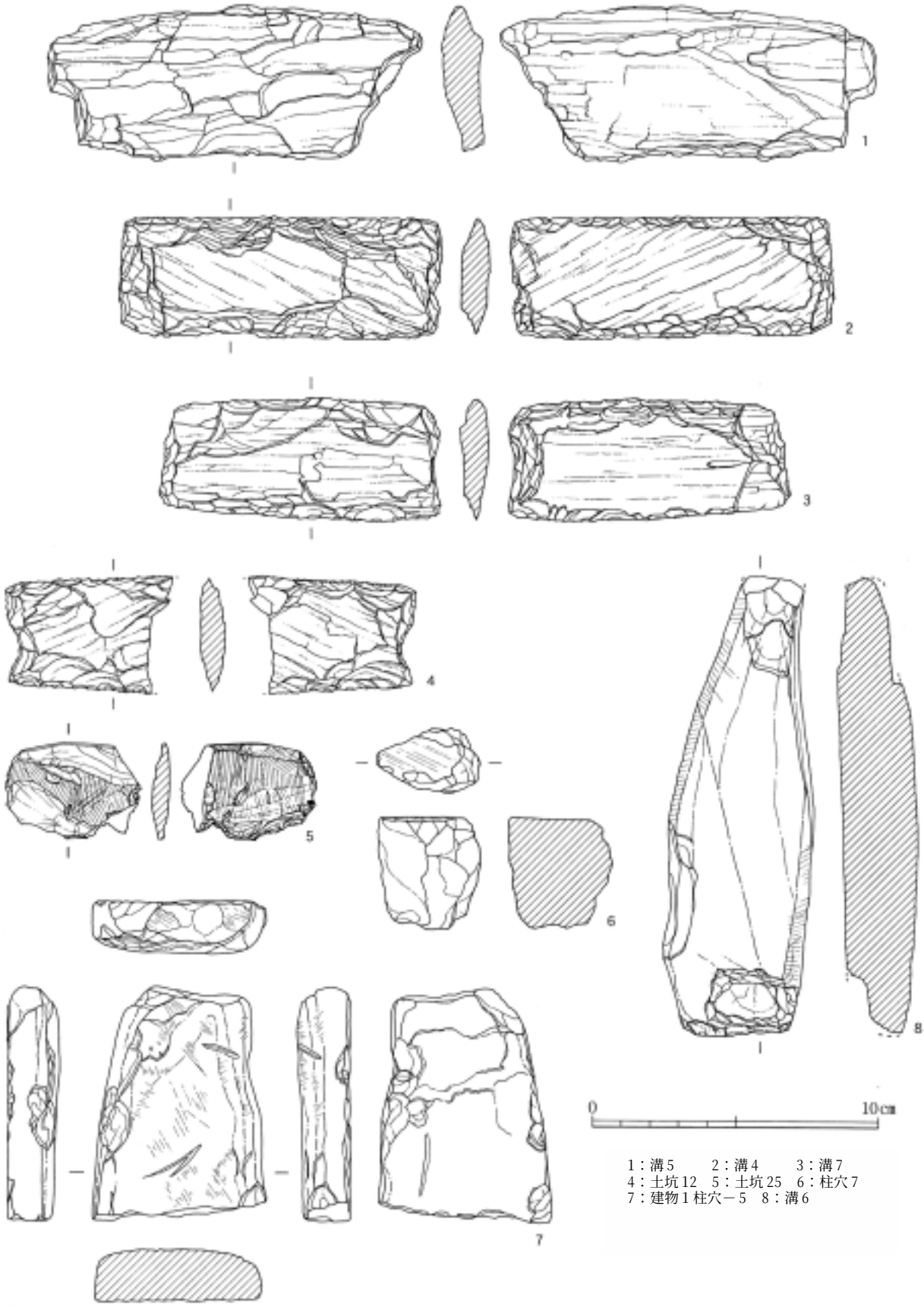
管玉　管玉は土壙墓３、配石墓４、配石墓11、第２遺構面直上包含層中（北東端）より出土しているが、いずれも石材・形態・技法は共通している。石材は濃緑色を呈する碧玉製で、表面は研磨によって光沢をもつ。長さはもっとも短い6.2㎜からもっとも長い12.3㎜まで若干の個体差がある。幅は3.3～4.6㎜までの1.3㎜の間に収まる。穿孔はいずれも両面穿孔を基本とし、第２遺構面直上包含層より出土した一例にのみ片面穿孔がみられる。孔径は1.5～2.7㎜までの大きさがみられるが、2.2～2.0㎜程度の大きさがもっとも多い。

１～11 の 11 点は土壙墓３、14～18 の５点は配石墓 11 よりの一括出土遺物である。また、配石墓４から１点出土しているが、この遺構は土壙墓３と切り合い関係をもつ遺構であることから、本来は土壙墓３に帰属する可能性がある。

小玉　小玉はガラス製と滑石製のものが１個体ずつ出土している。いずれも包含層出土資料であるために共伴資料による年代的位置などは不明である。ガラス小玉(19)は長さ、幅ともに3.4㎜をはかり、スカイブルーを呈するが、風化しており、やや透明感にかける。表面には気泡を観察することができる。

滑石製小玉(20)は長さ3.5㎜、幅2.4㎜で、濃茶に近い色を呈する。側面には稜をもたないが、ごくわずかながら中央部が膨らむ胴張り状に作られている。

管玉は１例を除いて、いずれも弥生時代前期の埋葬施設から出土している。そのうち土壙墓３では墓壙内全体に散らばった状態で出土しており、被葬者に着装された状態とは考えにくい。装身具として副葬されたというよりも葬送の際に用いられたものとみられる。比較的古い時期の管玉出土例として注目することができるであろう。



1：溝５　　2：溝４　　3：溝７
4：土坑12　5：土坑25　6：柱穴７
7：建物１柱穴－５　8：溝６

図36　石器

またガラス小玉・滑石製小玉は庄・蔵本遺跡の他地点でも数例出土しているが、古墳時代中・後期に属する可能性がある。

②　石鏃

石鏃は13点出土している（図35－21～33）。いずれもサヌカイト製の打製石鏃で、松木武彦による分類案（松木1989）の平基式（21・22・29）・凹基式（23～28）・凸基Ⅰ式(33)・凸基Ⅱ式（31・32）の各型式が出土している。平基・凹基式石鏃の長さは14.0～16.5㎜、幅は10.0～15.0㎜、重さは一部を欠損するものを含むが、0.3～0.7gの間におさまる。凸基Ⅰ式の長さは一部を欠損するが、29.5㎜、幅は14.0㎜、重さ2.0g、凸基Ⅱ式の長さは一部を欠損するものを含むが、39.0～50.5㎜、幅は11.0～13.5㎜、重さは2.3～3.0gをはかる。凹基式のものを細かくみると、刃部側縁端がやや内湾し、基部は緩やかな「U」字形に抉り込むもの（23～25）、刃部中央付近で屈曲し、基部に向かって外反するもの（26～28）がある。30は凸基式石鏃の先端部と考えられる。

21・22・23・24・26・27・28・31の８点は土壙墓３から一括出土したものである。８点のうち５点は先端部が欠損している。形態は平基式・凹基式・凸基Ⅱ式がみられる。副葬品の可能性があるが、出土状況は遺構内に散らばった状態で出土しており、あるいは人体に射込まれた鏃である可能性もある。同一の墓から管玉が多量に出土しており、土壙墓３の被葬者が他とは異なる特殊な墓であったことがうかがえる。

他の遺構・包含層出土石鏃もおおむね弥生時代前期に属するものと考えられる。

③　石包丁

打製石包丁３点、磨製石包丁１点、石包丁未製品１点が出土している（図36－１～５）。１は結晶片岩製の打製石包丁未製品と考えられる。２～４の打製石包丁はいずれも紅簾片岩を石材に用い、長方形の板状に加工したものである。基本的には打割と剥離による打製品であるが、２の片面背部（図・右）には広範囲に磨きが見られる。２・３は完形品で、２は長さ11.3㎝、幅4.3㎝をはかり、３は長さ9.8㎝、幅4.3㎝をはかる。４は欠損するが残存長5.9㎝、幅4.2㎝である。長さは異なるものの、いずれも幅はほぼ近い数値となっており、同一の技術で製作されていることをうかがわせる。また、刃部は両長辺ともに直線的に平行する。短辺は２・３とも一方は直線的で、他方は緩やかな抉りをもつ。４の短辺は抉りをもっている。５は磨製石包丁の破片と考えられる。緑色片岩を研磨して作る。いずれの側面も端面をもち二次的に加工されたものと考えられる。

１から５はいずれも第１遺構面の遺構から出土しており、弥生時代のものが後世に混入したものと考えられる。

④　砥石

砥石は２点ある（図36－６・7）。２点ともに砂岩製の砥石であるが、きめは７の方が細かく同一の材質ではない。６は最大長3.8㎝、最大幅3.5㎝を測る不整形を呈する。一方の短側辺のみ砥石として用いている。柱穴７より出土したものである。７は下面が平坦で、上面の角は磨かれているため蒲鉾形の断面を呈する。最大長8.0㎝、最大幅6.0㎝をはかる。基本的には上面および両長側辺を砥石として利用するが、下面や短側辺（図・上）の一部にも使用痕が残る。建物１柱穴－５から出土した。

⑤　敲石

不定形な敲石が１点出土している（図36－８）。砂質片岩製で長さ15.9㎝、幅5.1㎝、厚み2.6㎝をはかる。上下端に打撃痕があり、ともに一部剥離している。

⑥　鉄製品

所属年代は不明であり、古墳時代以降の可能性も考えられる鉄製品が２点出土している（図35－34・35）。34は幅8.0㎜の長方形状のヤリガンナの柄部片と考えられる。35は刃部破片で、片丸造りのヤリガンナあるいは鉄鏃などの可能性がある。34・35ともに古代の掘立柱建物の柱穴より出土した。

５　古墳時代・歴史時代の遺構

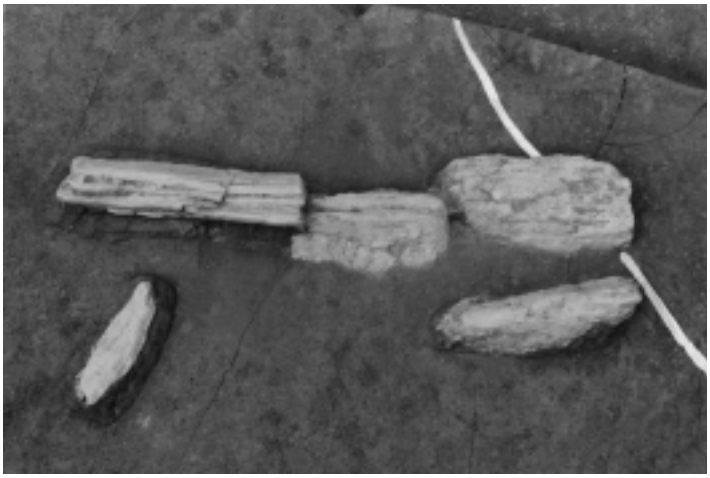


図37　石棺墓3

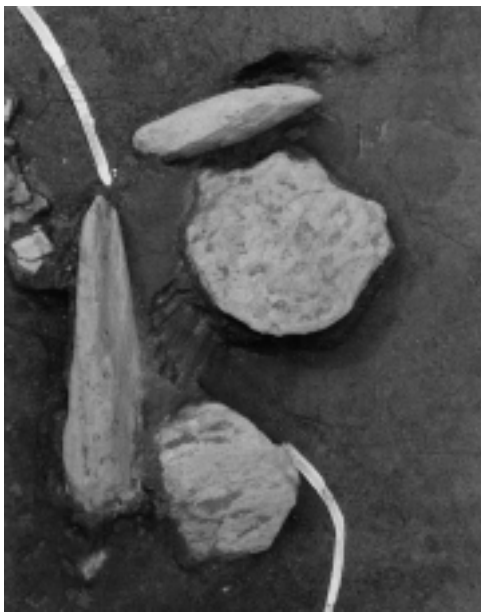


図38　石棺墓4

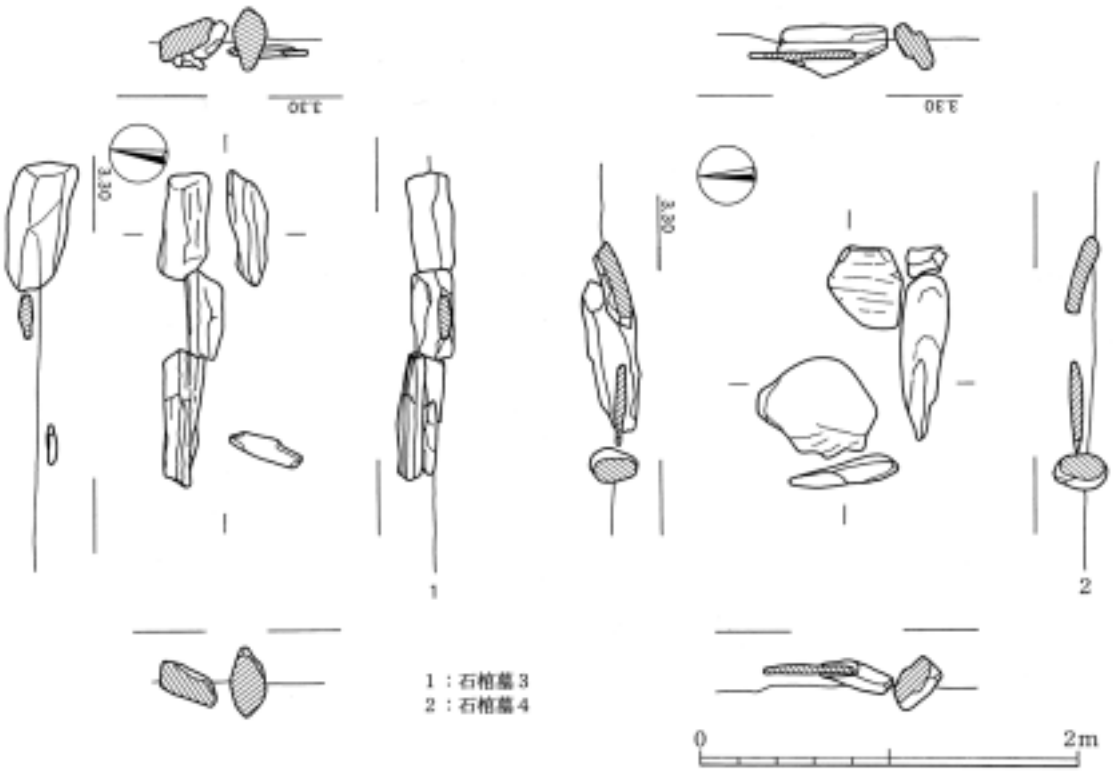


図39　石棺墓3・4の状況

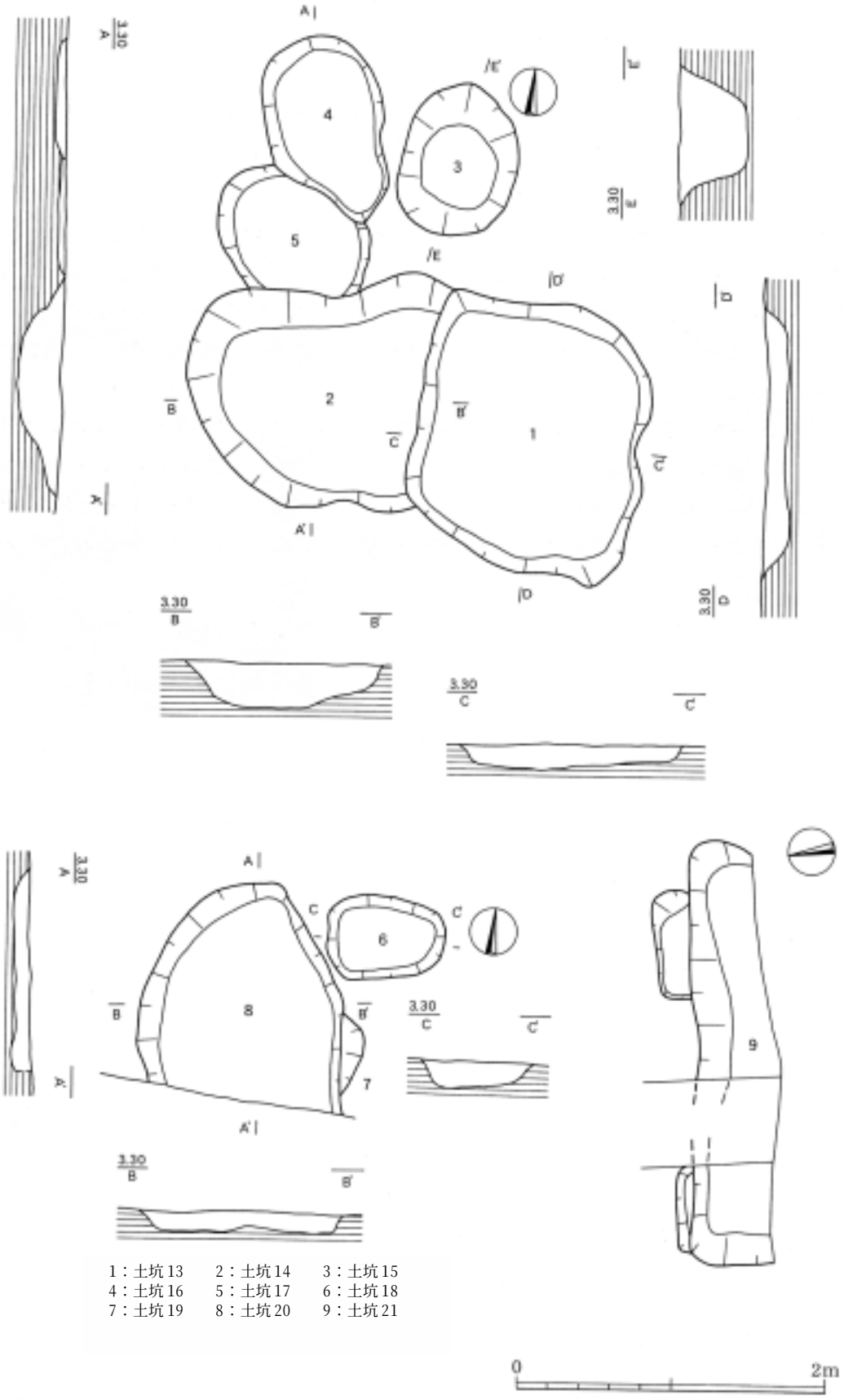


図40　土坑13・14等の状況

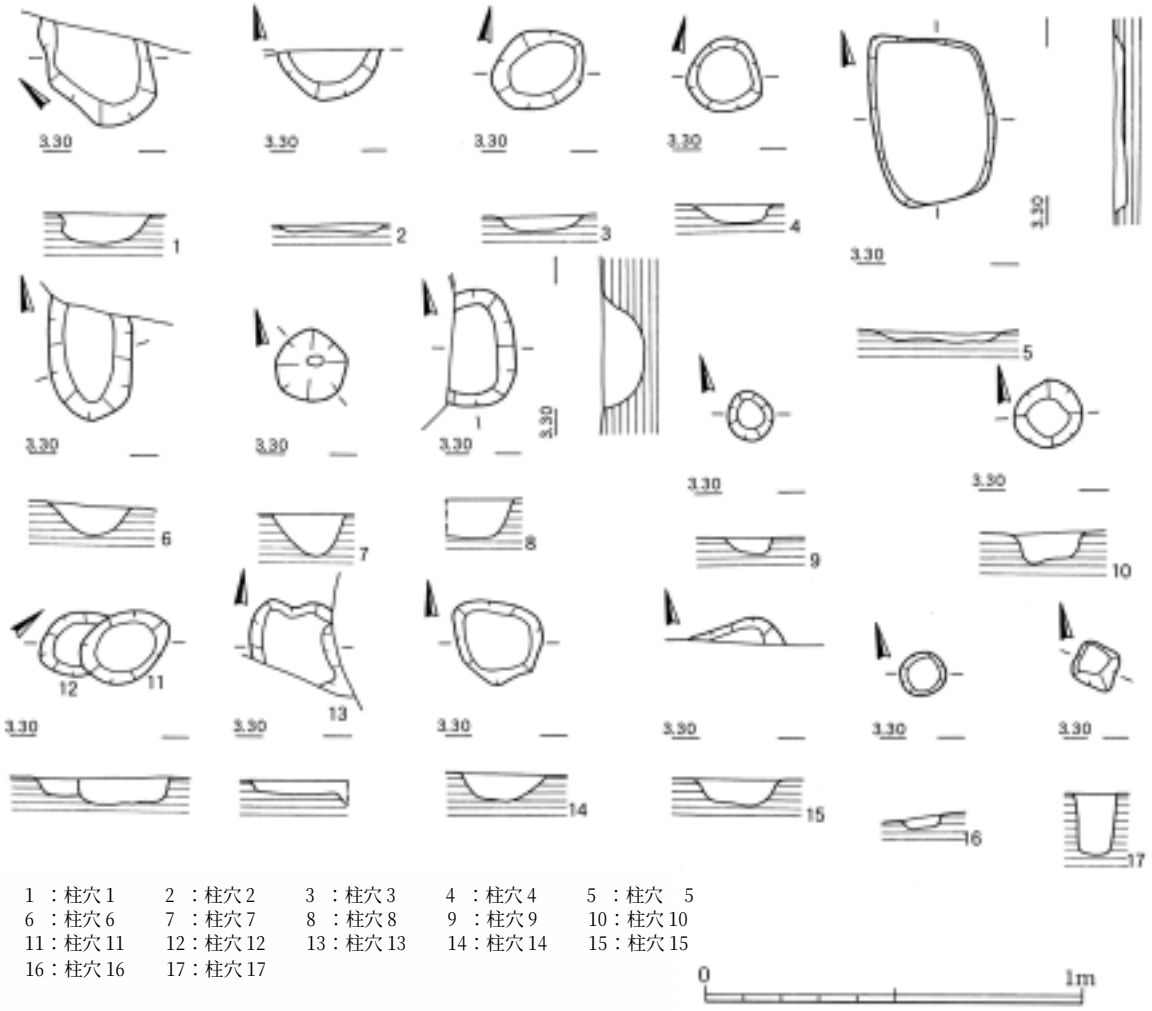
(1)　古墳時代の遺構

古墳時代の遺構としては石棺墓と土坑がある。

①　石棺墓

弥生時代終末から古墳時代中期にかけての遺構ではないかと推測されるものに２基の箱式石棺墓がある（図39）。石棺墓３は調査区の中央付近にあり、その遺存状態は結晶片岩の板石４石が横並びに配置される形であった。これら４石は側壁の残骸である可能性が高い。石の配列からみて主軸は東西であろうと思われるが墓壙の規模等についは不明である。石棺墓４は石棺墓３より西に約2.5mの間隔をおいて発見された。土坑12と重複し、これを切る形で構築されており、主軸を東西にむける。石材はすべて結晶片岩であり、現状では西小口と南側壁体の石材が組み合う状態で立てて配されており、これとは別に床面の石材とおぼしき２石がみられたに過ぎない。墓壙は不明であった。こうした状態であるために、本来の規模を知ることはできない。

これら２基の年代的位置づけの根拠となったのは層位的関係である。平面的な位置が弥生時代前期の集団墓と重なり、主軸も同様の状態をとるために、この場合には当該時期のものである可能性を否定しうるのか否かが当然問われることになろう。しかし石棺墓４が土坑12を切って構築されていたという事実は重要で、やはり２基の石棺墓については弥生時代後期中葉より新しいものと推定するのが妥当だ



1 ：柱穴１　2 ：柱穴２　3 ：柱穴３　4 ：柱穴４　5 ：柱穴　5
6 ：柱穴６　7 ：柱穴７　8 ：柱穴８　9 ：柱穴９　10：柱穴10
11：柱穴11　12：柱穴12　13：柱穴13　14：柱穴14　15：柱穴15
16：柱穴16　17：柱穴17

図41　柱穴の状況

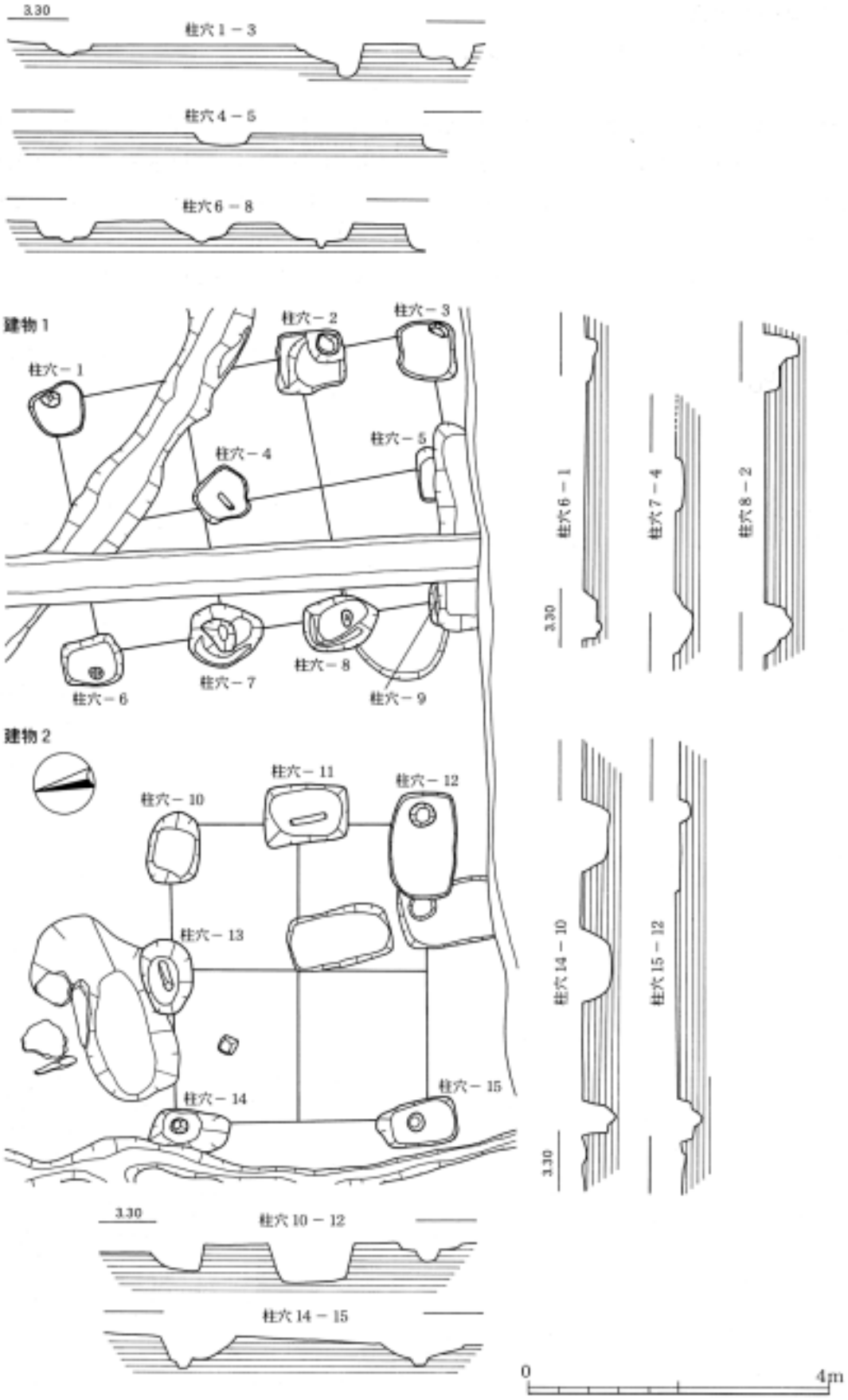

3.30
柱穴１－３
柱穴４－５
柱穴６－８
建物１
柱穴－１
柱穴－２
柱穴－３
柱穴－４
柱穴－５
柱穴－６
柱穴－７
柱穴－８
柱穴－９
柱穴６－１
柱穴７－４
柱穴８－２
建物２
柱穴－10
柱穴－11
柱穴－12
柱穴－13
柱穴－14
柱穴－15
柱穴14－10
柱穴15－12
柱穴10－12
柱穴14－15
0
4m

図42　建物１・２の状況

と思われる。本地域では古墳時代前期末から中期にかけて、箱式石棺墓が盛行するので、これら２基の石棺墓は上記の時期に営まれた可能性を指摘しうる。

②　土坑

調査区の北東部で検出された土坑群中の土坑13からは５世紀後半代の須恵器片が出土しており、遺構の性格は不明ながら、古墳時代に位置づけられる可能性がある(図40)。こうした推定が可能ならば、本土坑に切られ、年代的に先行することが確実な土坑14と土坑17についても、当該時期を含むそれ以前と考えられることになる。

土坑14からは同様に須恵器の小片が若干量出土し、土坑17からは石鏃が出土した。ただし、上記のいずれの土坑についても出土遺物のほとんどは小片であり、混入遺物である公算は大きいので、これらの土坑の時期については位置づけを保留しておくのが妥当かと思われる。なお土坑13は方形の掘り込みで、南北辺の長さ1.8m、検出面からの深さ30.0cmをはかる。同様に時期不明ではあるが、古墳時代の可能性ありとみなされる遺構としては土坑５基、柱穴17基がある（図41）。

このほか、包含層からは６世紀後半代を中心とした時期の須恵器類が少なからぬ量出土しており、周囲には当該時期の遺構が存在した可能性が指摘されるところではある。

(2)　古代の遺構

当該期の遺構としては奈良時代に属する２棟の建物跡がある。これらは調査区中央南側において棟を接する状態で検出された（図42）。

東側の建物１は現状で桁行３間、梁間２間を示し、棟方向は南北であるが、調査区の南側にさらに延びる可能性をもつ。柱穴は不整形なものが多いが、柱穴－６や柱穴－３、柱穴－２は方形を呈する。平均的な規模をもつ柱穴－３で長辺70.0cm、深さ20.0cmである。柱痕跡は柱穴の隅に寄った状態のものが多く、その規模は15.0cmないし20.0cm程度の径をもつ。柱痕の心芯同士を結ぶと、その並びは桁方向も梁方向も揃わず、棟のゆがみは顕著である。このうち柱穴－1、柱穴－５、柱穴－7、柱穴－９の４基の埋土中からは須恵器の坏、坏蓋、甕形土器およびヤリガンナとみられる鉄製品などが出土した（図46）。これらの遺物が年代推定の根拠となった。

西側の建物２は現状で桁行２間、梁間２間である。ただし西辺における柱穴－14と柱穴－15間、および南側の柱穴－15と柱穴－12間では柱穴が未検出である。棟方向は南北と推定されるが、その場合には本棟についても調査区の南側にさらに延びる可能性が指摘される。ただし棟方向を東西に推定し、

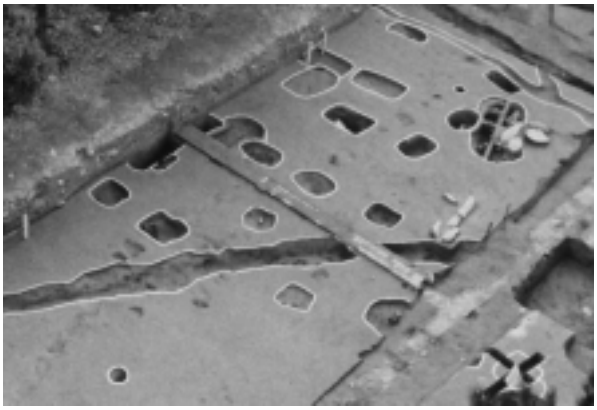


図43　建物１・２

図44　建物１

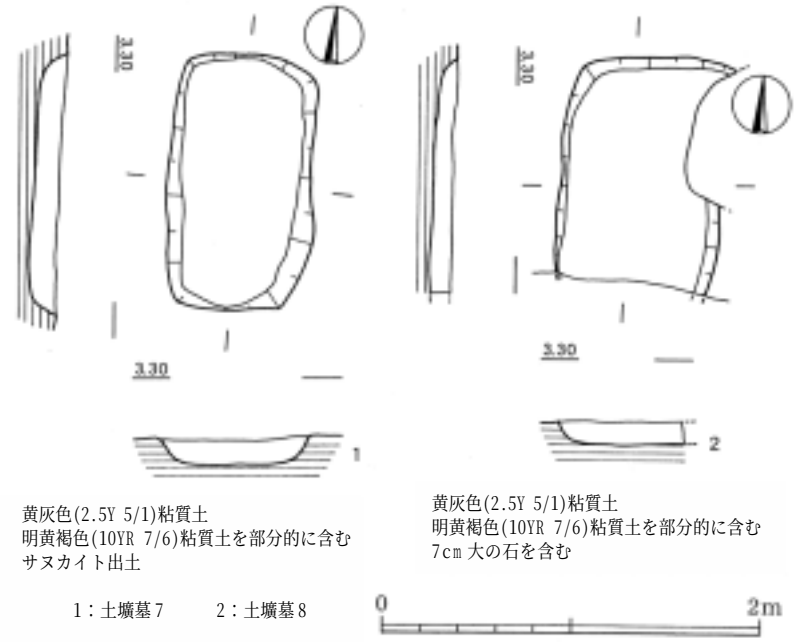


図 45　土壙墓７・８の状況

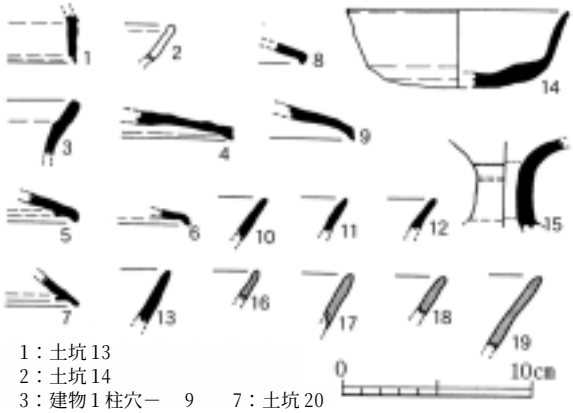
桁行２間、梁間２間の建物を復原することも可能であり、いずれとも判断はつかない。柱穴の平面形は不整形ながらも長楕円ないし長方形を呈するものが多く、平均的な規模をもつ柱穴－10 で長径 94.0㎝、深さは 27.0㎝である。柱穴－10、柱穴－11、柱穴－ 13 の３基の埋土中からは須恵器片が出土し、建物１と同様の年代的位置づけが可能であることが判明した。

これら２棟の建物は、棟の主軸が真北を指向していることからみて、整然とした配置をとっていた可能性がある。周囲に関連施設があるかどうかは不明であるが、柵列などを伴うとすれば、当時の村落首長層の居宅なり公共的施設なりといった評価を下しうるのかもしれない。

なお建物１の南半部では方形の大型土坑21が、建物を切る形で掘り込まれている。埋土中からは須恵器が出土した。建物跡の下限を知る資料として位置づけられるかもしれない。

(3)　中世の遺構

調査区の西半部、建物２と重なる場所で、鎌倉時代のものと推定される土坑墓が検出された。図45には確実と思われる２基を示している。ともに平面形は隅丸長方形を呈し、主軸を南北にとっている。残りのよい土壙墓７で規模の概要をみると、南北長 1.4m、東西幅 68.0㎝、深さ 14.0㎝をはかる。土壙墓８の埋土中からは瓦器椀の破片、および常滑産の甕片が出土した。ただしこれらの遺物は小片であり、副葬品とはみなしがたい。



1：土坑 13
2：土坑 14
3：建物１柱穴－　9　　7：土坑 20
4：建物２柱穴－ 13　　8～13・15・17～19：土坑 25
5：建物１柱穴－　7　　14：柱穴６
6：建物１柱穴－　1　　16：建物１柱穴 -5

図 46　建物・柱穴・土坑出土土器

６　古墳時代・歴史時代の遺物

(1)　遺構出土の遺物（図 46）

１は土坑 13 出土の須恵器杯蓋である。口縁端部には段を有しシャープに仕上げ、天井部と体部の境に稜を有する。５世紀後半の時期に属する。２は土坑 14 出土の土師器である。口縁は内面をおさえ端部をやや肥厚させている。土坑14からは、このほかに甕胴部片などが出土している。以上の２点が古墳時代に属するが、以下の資料は古代以降のもので占められる。

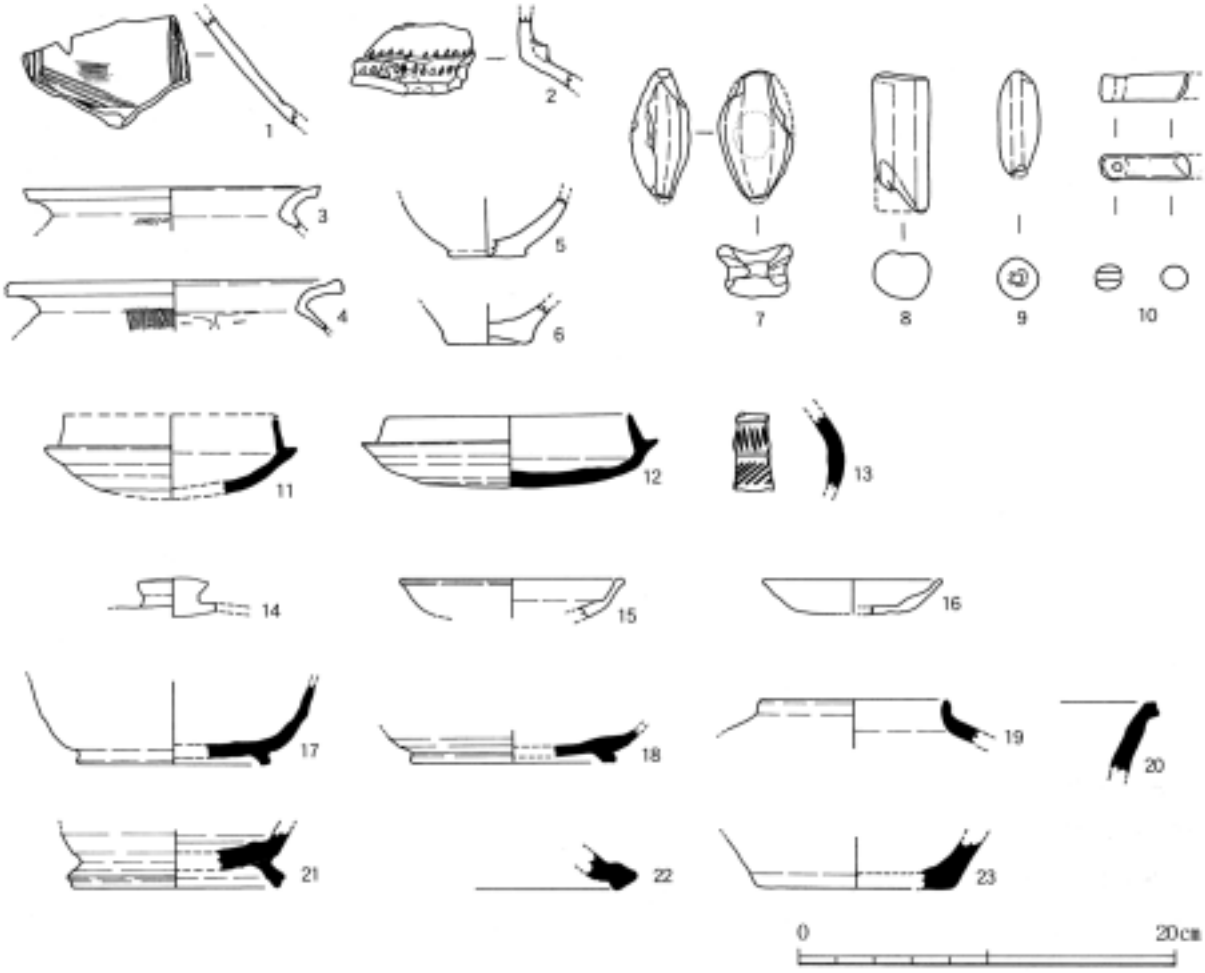


図 47　包含層出土土器(2)・土製品

３・５・６は建物１からの出土品で、３は柱穴－９出土の須恵器甕類などの口縁部片である。５は柱穴－７出土の須恵器蓋の口縁部片で、内面にかえりが付く。端部およびかえり部端も丸くおさめ鈍い。７世紀中頃～後半の時期と考えられる。６は須恵器蓋であり、口縁端部は粘土帯を貼り付け、強くナデることで屈曲して外反する。３・６は奈良時代に属する資料である。

４は建物２柱穴－13出土の須恵器蓋で、奈良時代に属する資料である。

７は土坑20出土の須恵器蓋の口縁部片で、内面にかえりが付く。かえりは立ち上がらず水平方向に取り付けられる。７世紀中頃～後半と考えられる。土坑20からはほかに甕破片も出土している。

８～13･15･17～19は土坑25出土遺物である。８・９は須恵器蓋の口縁部片で、９は灰白色を呈し軟質、８は青灰色を呈する。10～13は須恵器杯で青灰色を呈するものと焼成のやや甘い灰白色ものがある。15は壺類の頸部と考えるが、類例に乏しくあるいは高坏脚部の可能性もある。青灰色で焼成は良好である。17～19は瓦器椀である。土坑25出土遺物は古代から中世までの幅をもつ。

14は柱穴６出土の須恵器である。軟質で灰白色を呈する。底部と体部の境は屈曲しつつ、強く横ナデし、口縁端部は外傾しながら丸くおさめる。

16は建物１柱穴 -5出土の瓦器椀の口縁部片である。このほかに軟質の須恵器杯１点が出土している。なお図示はしていないが、土壙墓７からは土師器皿１点、建物２柱穴－11から須恵器杯の口縁部、甕胴部片などが出土した。

(2)　包含層出土遺物（図47）

いずれも遺構との関係は不明であるが､旧耕土から第１遺構面上面までの間で多数の遺物が出土した。

①　古墳時代の遺物

11・12はともに須恵器の杯身である。11は口縁端部は欠損するが、受け部など端部はシャープさがなく、肥厚し丸くおさめている。底部外面ヘラケズリの範囲は狭いが、立ち上がりは高く直立し、胴部もやや丸みがあり深さをもつ。以上の特徴から田辺編年（田辺昭三1981）のMT15ないしTK10型式に位置づけられる。12の口径は約13.0㎝、高さは約3.7㎝をはかる。口径の割に高さがなく扁平な作りである。口縁端部は丸くおさめ、立ち上がりはやや内傾しながらも、比較的高くしっかりしている。焼成はやや甘く、底部外面ケズリは逆回りである。MT85ないしTK43型式に位置づけるのが妥当であろう。13は壺の胴部と考えられる。沈線の間を綾杉状に櫛描列点文で埋める。そのほか、杯蓋などの古墳時代須恵器細片が数点出土している。

②　古代の遺物

14～16は土師器、17～23は須恵器である。14は土師器蓋のつまみ部、15・16は杯である。17・18は須恵器の底部、19は短頸壺の口縁部片、20は広口の壺の口縁部片である。21・22は壺底部から脚部の破片である。23は平底の壺底部である。他にも包含層より、古代・中世の破片遺物が多数出土しているが、８世紀前半頃を中心とする時期の遺物が多くみられる。

③　時期不明の土錘

所属時期は不明であるが、包含層中からは土錘が10点出土した。７～10は土錘である。形態は各種のものが見受けられる。７は有溝土錘で平面形は長楕円形であり、長さ6.8㎝、幅3.8㎝、重量は54.9gをはかる。８は円筒状の土錘で一側面にわずかな窪みを有する。長さ7.4㎝、径2.9㎝。９は管状の土錘で、両端は丸みを帯びて絞られる形態をもち、長さ5.5㎝、径2.1㎝、重量は19.4gをはかる。10は棒状の土錘で端部に穿孔が行われている。現長は4.7㎝、径は1.3㎝ある。

(3)　中世の遺物

土壙墓８出土の資料がある。細片のために図示しないが、和泉型瓦器椀の底部片で、13世紀代に属するものと思われる資料１点と、常滑産の甕で13世紀代に属する資料１点がある。

第３節　調査成果のまとめ

今回の調査では、第１遺構面、第２遺構面という２つの遺構面が検出された。前者では鎌倉時代、奈良時代、古墳時代前期、後者では弥生時代前期という、おおむね４つの時期の諸遺構であった。縄文時代の遺構面が確認されなかったとはいえ、こうした状況が判明したことにより、当初の予想が正鵠を射たものであったことがわかる。

土地利用の変遷については、各時代の具体相が明らかになり、より空間的な把握が可能となった。すなわち、弥生時代前期には墓地空間として利用され、この地の北には住居空間と生産空間が広がっていたものと想定される。その後弥生時代中期から後期、および終末期までの明確な状況は確認できておらず、この間には空白期間を設定せざるをえないが、古墳時代前期には再度生産空間として利用され、この地では広範にわたる生産活動が展開されていたとみられる。その後奈良時代には居住空間としての利

図48　調査風景

図49　調査風景

用へと変化した。庄遺跡における過去の調査（体育館地点）では、今回の出土例に類似した平面方形の柱穴を有する建物跡がみつかり、当時の郡あるいは郷にかかわる建物、ないしこうした施設にかかわりのある人々の居宅に比定されている。こうした近隣での状況を勘案すると、今回の建物跡についても同様の性格のものと推定することが可能であろう。

鎌倉時代には再び墓地空間としての利用がみられる。本調査地点北西の第2次調査地点での調査では、平安時代の木棺直葬墓が検出されており、荘園活動が活発化する平安時代から鎌倉時代には墓地空間であったと考えられる。

主目的たる稲作農耕開始期における社会構造の解明については、居住形態の調査を通じての把握といった研究の方向性を想定し、今回の調査がその端緒となることを期待したわけであるが、意外にも当該期の墓地空間の発見が先行するという結果になった。墓制としては、箱式石棺墓、配石墓、土壙墓、甕棺墓と４種に大別したが、そこには当然、置石墓、覆石墓の範疇に属するものも含まれる。四国初の事例として注目されるところではあるが、このように多様な埋葬形態を有する遺跡は、山口県土井ヶ浜遺跡等の他には類例がなく、弥生時代前期の集団墓として日本列島有数の遺跡に数えられよう。また、石棺墓１には長側壁を３段に積み重ねるという石室的構築法が用いられており、こうした要素は朝鮮半島に類例がみられるに過ぎない。特に忠清南道南城里石棺墓の構造には類似点が多い。そのため、石棺墓は朝鮮半島から稲作農耕文化をもたらした人々の墓のひとつと考えることも可能であるのかもしれない。石棺墓１については、幸いにも医学部同窓会をはじめとする関係各位のご厚意により、現地において永久保存がなされることとなった。後世における再調査が期待される。

また四国における弥生前期の集団墓としては最近の調査例として愛媛県持田町３丁目遺跡遺跡が知られている。そこでは本遺跡の状況と非常によく似た造墓構造をもつことが判明しており、上記の問題提起を深める意味でも両者の比較作業が必要である。なお管玉と石鏃を伴出した土壙墓の発見は、弥生時代の争乱が議論されつつある近年の学界情勢に即応した貴重な事例として特筆されるべきものである。

以上のように、今回の調査では、特に弥生時代前期の社会構造を解明する上での貴重な資料がえられた。今後、各地での調査例が増加することにより、当時の死生観の実体が解明され、ひいては仏教伝来後、あるいは現代への影響が審かにされるものと考える。